
不変の意思を持つ凡人は高みに上る

ダメ中年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不変の意思を持つ凡人は高みに上る

【Nコード】

N5547Y

【作者名】

ダメ中年

【あらすじ】

麻帆良に住む一般人のとある男子生徒。学年の代表生徒である事以外は、全くもって普通である。代表といっても、体のいいパシリだ。そんな彼が、色んな偶然が重なった結果、「闇の福音」であるエヴァンジェリンと出会ってしまった。その切欠で、裏側の世界を知る事に。そんな彼は確固たる意思をもって、自らその世界に踏み込んで行く。曲がらず、折れず、流されず。そんなたった一つ不変の意思を持って突き進む！

※作者は小説初めてです。暖かく見守って頂けると幸いです。

※P V 1 0 0 0 0 突破しました。有難う御座います！

プロローグ(改) (前書き)

初めまして。ダメ中年と申します。

作者は小説初めてです。

誤字、脱字、アドバイス、感想を頂けると嬉しいです。

批判も有りだと思えます。只、感情に任せた物ではなく、どこがどうダメなのか、教えて頂けると勉強になります。

作者のLPは一桁です。皆様、優しさライセンスを持って、接して頂けると幸いです。

何卒ご指導の程宜しくお願い申し上げます。

では、どうぞ。

プロローグ(改)

1

「……どうした？もうギブアップか？」

そう挑発するように、エヴァンジェリンは言った。

そんな問いに、肯定の意が返ってくる事などありえない事は承知の上でだが。

目の前で四つん這いになりながら、息を荒くしている少年は、頑固で一途なのだ。

そんな事は、自分が一番よく知っている。この麻帆良に住んでいる誰よりも。

現に自分を見上げるその瞳には、強い意志が感じられる。

「そんな事……ある訳……ないでしょう」

少年は立ち上がりながら、確固たる口調で言った。

エヴァンジェリンはニヤリ、と口角を吊り上げた。

「では、もう一度だ。構えろ」

少年は僅かに腰を落とし構えた。エヴァンジェリンは淀みなく、最速の一步を踏み出しその顔面に掌底を繰り出す。

身長差がある為、繰り出されたその一撃は下から顎に向かって最短の距離をもって向かってくる。

その一撃を少年はスウェーをして避ける。追撃を予測した少年は、間髪いれずにバックステップをした。

エヴァンジェリンは、先程の一步よりも遥かに早い踏み込みをもって追撃する。

少年が着地した瞬間にはエヴァンジェリンは既に少年の懐に入っていた。彼の鳩尾に手を添える。

短い呼気と共に吐き出された一撃を、少年は身体を半円を描くようにかわし、その遠心力を乗せた肘を繰り出す。

エヴァンジェリンはその力の乗った肘鉄を、下から掌底で撃ち突けるようにして軌道をずらす。

「モラッタゼッ！」

その声と共に、エヴァンジェリンの背中から飛び出してきた様に、チャチャゼロが切り掛かった。

少年は軌道をずらされた肘を打ち下ろす様に、チャチャゼロに叩き突ける。

飛び出したチャチャゼロは、出会い頭に向かってきた肘に打たれ、地面に叩きつけられた。

僅かにバウンドしたチャチャゼロに向かって、少年はトゥーキツクの要領で追い討ちをかける。

「甘いッ！」

エヴァンジェリンは、その一言と共に両手を重ね、凶悪な双掌打を繰り出す。

「ッ！」

その一撃を受け、少年はそのままの姿勢で砂埃を巻き上げながら後退した。

その間にチャチャゼロは体勢を立て直す。

「スマネエ、ゴシュジン」

「フン、油断しすぎだな。チャチャゼロ」

チャチャゼロは、首をコキコキ鳴らした。

「チャチャゼロが潜んでいた事は、知っていたのか」

僅かに目を細め、ニヤツと笑う。

「知ってはいませんでした、見える範囲にいないという事は、そういうことでしょうか？」

微塵も警戒を解くことなく答える。

「お前の後ろにいたかも知れんぞ？」

ニヤニヤしながら、試すように問う。

「気配がありませんでした。それに後ろにいるならば、バックステップのタイミングで挟撃出来たでしょう？ 故に、エヴァの後ろにいる事は明白です」

そのセリフには確固たる自信が伺える。

「可愛げがない。つまらん」

腕を組み、眉間に皺を寄せる。その姿を見て少年は、そういう問題ではないでしょう、と呟いた。

「まあ、お前は最初から可愛げがなかったがな
今更始まった事じゃないか、と眉間の皺を深くした。

「まあいい。仕切り直しとこうか。茶々丸、お前も加われ」

その一言に「はい、マスター」と離れて控えていた茶々丸が歩いてきた。

「今度は3人ですか……。一気に難易度が上がりますね……」

少年は、軽く深呼吸をして気合を入れなおす。

「何だ？ ギブアップでもするか？」

先程と似たセリフ。ただ今度は言外に、いいのだぞ？ やめても、と匂わす。返ってくる答えは解りきっているが。

「そんな事ある訳ないでしょう？」

こちらは先程と同じセリフ。言外に、解っていて聞いているんでしょう？ と匂わす。

数瞬のうち、同時に構える。その動きに合わせて、彼女の従者達は散開した。

2

「今日は、この辺で終わりだ」

少年は彼女の足元で大の字に倒れていた。激しく胸が上下している。

ゼエゼエ、と呼吸が荒い。呼吸だけではなく、服はボロボロでいたるところに血痕、体には擦り傷、切り傷、火傷と満身創痍、という言葉がぴったりだ。

「ああ……ありがとう……」

それだけ言うのがやっと、と言った感じだ。

「ほら、これを飲んで傷を治せ」

そう言っただけで治療薬を差し出す。

「いや……それはいいよ。エヴァ」

起き上がりながら僅かに首を振り拒否をする。

「バカか！お前は！その様な体でどうしようと言うのだ！」

眉根を吊り上げ激昂し、エヴァは無理やり飲ませようとする。それに対し、頑なに拒否する少年。

「大丈夫だよ。僕はこのまま帰るつもりだしね。」

それを飲んだら意味がないでしょう、と言い切る。エヴァは余計に興味が変わらん！と眉根を寄せる。

エヴァがトレーニング、戦闘技術、経験、魔法や気の教授などの全てにおいてメニューを組んで教えている。

無駄のないように、効率よく、最短で高みへ、と。しっかりと、傷を癒すのもまた鍛錬の一環。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルという存在は、ヒトという種ではなく、吸血鬼というヒトに似て、決してヒトではない生物。

エヴァ自身ヒトでない事に、今更、感慨がある訳ではない。寧ろ今となっては、この身に誇りさえ持っている。

『誇りある悪』を伊達に名乗っている訳ではない。

そんな不死の自分が長い年月をかけて、研鑽した知識、経験、技術の全てを以って取り組んでいるのだ。それを否定する事は、エヴァ自身を否定している事に他ならない、そう思っているのである。

そんな心の内を見透かすかの様に、彼は微笑みながら言った。

「ありがとう、エヴァ。この薬一つ飲む事にだって、君の緻密な考えがあつての事だと思う。解っているよ。君がどんなに僕の事を考えてくれてるかつて。でもね……僕も君も完璧ではないんだ。僕がこちら側に足を踏み入れて僅か1年。その1年の間にどんな事があつたか。僕も君も嫌と言うほど味わつたじゃないか。」

忘れてないよね？そう言外に含みながら、続ける。

「どんなに緻密に考えても想定外、というのは必ずあると思う。エヴァを疑っている訳じゃないよ？でもその時に君の側に居ることが出来なかった、なんて事にはしたくないんだ。どんな理由が在ろうとも。君と僕とでは研鑽してきた時間が違うから、僕が考えている事なんて杞憂かもしれない。でもそれは理由にならない。少なくとも僕にとつてはね」

エヴァはその瞳に確固たる意思を見た。やっぱり頑固だ、と思う。こういう目をしている間は絶対に譲らない、嫌というほど経験してきている。

「……全く……お前と言うヤツは……」

首を振りながら嘆息する。

「僕が君と出会って、決意してどんなセリフを言つたか」

まさか忘れちゃった？と言いたげに首を傾げる。それを聞いたエヴァは、カアツと顔を赤らめた。

「バ、バカモノ！それは今関係ないだろうっ！だ、大体、それと薬を飲まない事に何の関係があるというのだ！」

がおー、という擬音語が聞こえてきそうな、可愛らしい怒り方に彼は相好を崩したが、すぐに戻すと、

「関係？あるに決まつてるじゃないか。何時でも万全な状態の時に災難がやってくるとは限らないって君のセリフだよね？こんな状態の時にやってきて、どうぞゆっくり治してください、その間、そこから辺のカフェでブレイクタイム！なんていう奇特で頭がお花畑な敵がいたら、笑い死ぬよ。モンティパイソンか、フランク・ドレビン

警部補並みだね。」

その言い回しに、頬を引きつかせながら、お前はホントに14才かっ！と心の中で突っ込みを入れるエヴァであった。

ゴホン、と咳払いをすると

「ま、まあお前が頑固なのは、今に始まった事じゃないのは解っている。薬は飲まなくていい！だが！すっかり怪我を治してから帰れ！今すぐ帰るなど言語道断だっ！幸いにもココなら外との時間の流れも違うし、週末でもある。解ったな？」

これだけは譲らんど、とでも言いたげだ。

「そんなに心配しなくても大丈夫でしょう。幸いにも骨に異常もなさそうだし、筋断裂を起こしている訳でもないし。傷もそんなに深い訳でもないですよ」

理由は今さっき言ったし、以前自分が言ったセリフを反故にしちやうの？と問いかける。

その問いに苦虫を噛み潰したかの様な顔になる。むー、と唸っていると、

「たまには、マスターの言うことも聞いてはどうでしょうか？」

「ソウダゼ、タマニハイウコトキヤガレ」

従者二人が口を揃えて援護してくる。

「全く、みんな心配性なんだから。でも……ありがとう。うん、そうだね。たまには皆の言う通りにするよ。じゃあ少し休ませてもらうていいかな？エヴァ」

「当たり前だバカモノ。師匠の言うことは聞くものだ。行くぞ、茶々丸」

「オレハモウスコシルゼ」

「フン、好きにしろ」

エヴァは茶々丸と一緒に出て行こうとする。

「ありがとう、エヴァ、茶々丸。心配してくれて。」
彼はそう声を掛けた。

「いいえ、気にしないでください」

そう言つて茶々丸は律儀におじぎをした。エヴァは何も言わずチラと横目で見ただけだった。

オレニハナニモナシカヨ！と言うチャチャゼロに対して、弁解をする彼の声を耳の奥で聞きながら、エヴァは別荘を後にした。

3

別荘から出たエヴァは、ソファにどっかりと座った。

ふー、と深いため息をつき、茶々丸にすぐにワインを持って来るように伝えようとし、かぶりを振ってやめた。

「マスター、お食事の方はどうなさいますか？」

ワインとグラスを持ち、そう聞いてくる茶々丸。全く良く出来た従者だ、と思わずにはいられないエヴァだった。いや、違う。茶々丸は従者ではなく家族だ、と思い直す。

「ああ、今はいい。そうだな、2、3時間後でいい。」

「かしこまりました。お食事は2人分、重すぎずに少しスタミナが付く物でよろしいですか？」

その従者の答えにエヴァはフツ、と笑った。全く良く出来た妹だよ、お前は。そうポツリと漏らす。

「失礼ですが、マスター。私は人ではなくガイノイドです。マスターの親族ではなく従者です」

律儀に自らの在り方に答える従者に、

「いや、お前は既に私の大事な家族さ。それにヒトではないと言うのなら、私だってヒトではないぞ？」

ニヤリ、と笑ってみせる。

「いいえ、マスターは純粋な人間ではありませんが、充分そのカテゴリーの中に入ると推察致します」

「ほう、なぜそう思う」

「他の動物と人間の間に、一つ大きな隔たりがあります」
続ける、と先を促す。

「最も大きな違いは、遊び、です。」

「なるほど。ホモ・ルーデンス、ホイジンガだな」

「文化こそ遊びから生まれる、人間以外の他の動物が、文化と呼べる程の進化をしていないのは、遊び、がないからだと推察します」
ククツと喉を鳴らしたエヴァは

「その定義から言うと、お前も立派なヒトだよ。お前が野良猫に餌を与えている、という行動は立派な遊び以外の何物でもないだろうよ。空間的分離を行い、境界を設け、その断片的空間内において、規則お設けているだろう？」

茶々丸は首を傾げる。

「お前が餌をやっている場所の100メートル先に別の野良猫がいたとして、その猫にわざわざ餌を届けてやるのか？」

茶々丸は首を横に振る。

「しかし、その猫が近くに寄ってきて、餌を欲しがったらお前は追いついたりしないだろう？その猫が先に居た猫を排しない限り。その猫たちは仲良く餌を食べる訳だ。そして食べきって、猫たちは各々好きな時間を過ごすなりして、散っていくわけだ。」

茶々丸は黙って聞いている。

「これを、そこら辺で遊んでるガキ共に置き換えてみる。野球でも、サッカーでも、鬼ごっこでも、何でもいいさ」

暫く黙考した後

「何となく解ります」

「まあ、私の説明はかなり端折って、的確では無かったかもしれんがな。そういうことだよ。そういう意味で言えば、私達が今さっきやってきた事も遊び、と言えるわけだが。」

そうなのですか？と茶々丸は首をひねった。

「まあ、悩んで考え、自分なりの納得する答えを見つけろ。お前は

まだ生まれたての赤ん坊と然程変わらんよ」

そう言ってエヴァは茶々丸が持ってきたワインをグラスに注いだ。

「そうだな、別荘から出てきたら聞いて見たらどうだ？」

「海人様に……ですか？」

「ああ。あいつも中々、勉強しているみたいだからな」

クイツとワインを煽る。

「そういえば、もう1年になるのですね。」

「フン、そうだな。落ち着かない1年ではあったが」

ワインを飲み干し、不敵な笑みを浮かべる。

「その割には、楽しんで居られたように思います。」

そう言いながら、グラスにワインを注いでいく。

「そんなのは、ここ最近になってからだ。まあ、退屈はしなかったがな」

それきり、黙り込んで窓の外を見つめる。外はちょうど陽が沈みかけた頃合だった。そう言えば、初めて出会った時も、この位の時分ではなかったか？

そうだ、ちょうど逢魔ヶ刻だったな。

未だ、自分の別荘内でダウンしているであろう、駆出しの魔法使い生徒、重岡海人と出会ったのは。

エヴァはその時を思い出し思考の海に沈んでいった。

茶々丸はその主人を目にし、邪魔にならない様、静かに礼をして夕食の準備に取り掛かった。

プロローグ(改) (後書き)

いかがでしたか？

短いプロローグの為判断が難しいと思いますが、アドバイス、感想などお待ちしております。

句読点、状況描写、難しいですね。

皆様の作品に比べると、力量不足を感じます。

これからも、頑張りますので宜しくお願いいたします。
お読み頂いて有難うございました。

第1話 凡人は逢魔ヶ刻に大禍事に出会う（前書き）

作者のダメ中年です。

第一話お届けです。

感想、アドバイス、お待ちしております。
では、どうぞ

第1話 凡人は逢魔ヶ刻に大禍事に出会う

全ての授業を終え、教室には数人の生徒しか残っていなかった。

麻帆良学園男子中等部1年D組。

それが彼、重岡海人しげおかひとがいる教室の名前である。

ここ麻帆良では小、中、高とエスカレーター式に上って行く人間が殆どであり、他の土地から引っ越してきてこちらの学校に入学、編入する学生は極稀である。

そんな極稀な学生の一人が彼であった。以前は東京の三鷹市に住んでおり、祖父母がこの麻帆良に住居を構えていた。

祖父母が事故で他界したのは海人が小学6年に成ったとほぼ同時であった、両親含め3人家族であった重岡一家は家族会議の結果、祖父母の家に移り住もうと引っ越してきた。

幸いにも父の勤務先は、以前の住まいもここ麻帆良からでも、大幅な通勤時間の変更もない事から問題はなかった。

両親の心配は息子の海人の事であった。丁度多感な年齢に差し掛かるこの年代の時になるべくなら、転校は控えた方がいいだろう、中学校入学に合わせた方がいいのでは？と。

海人としては離れたくない事情が有ったわけでもないし、転校した所でそこそこには上手くやっていく自信はあったし、特に不安になる要素も見当たらない。

そんな理由から引越しに関しては問題はしていなかったが、勘違いしたのは両親であった。海人は小さな頃からあまり我俣を言わなかった。きっと自分を押し殺しているのだろう、と。

海人にしてみれば、それってちゃんと息子を見えますか？と首を傾げたい所だ。

我俣を言わないのは単に言う必要が無かっただけであり、自分にりに要望を伝えてきたつもりだ。

まあ元々、物欲等は薄かったし、何とか考えて工夫すれば、希望

する事柄の大体は叶ってきた。

海人としては誤解を解く必要も感じなかったし、何かあった時に我俣が通り易いだろうと思ひ、そのまま誤解したままでもらっているが。

だが、海人が両親の心の内を知っていれば、きっとこう言うだろう。

逆に中学からの入学の方がきつくはないですか？と。環境がガラリと変わるわけだ。制服、校舎、教科。

只でさえ不安要素が有るのだから、当然顔見知りで固まるだろう。そんな不安要素一杯詰まった、人間達が集まる中で完全イレギュラーな、見た事も無い奴の事なんか気に気を回す人間が、そうそう居るとは思えない。

ましてや麻帆良はエスカレーター式なのだ。自分以外みんな知り合い、なんて事の方が確立が高い。

そんな事情（勘違い）もあり、一家は海人の中学の入学に合わせて此方に引っ越して来た。

そして、引っ越し終えた矢先の事だった。急遽、父親の転勤が決まったのは。

海人は思った。何ですか、そのアメリカのコメディードラマ、ファミリータイズみたいなノリは。

まあ、両親はヒッピーでもないし、僕も共和党を支持している訳でもないし。

何と言ってもマイケル・J・フォックスに似ても似つかないですが、と。

エヴァがこの時ここにいたら、きっとこう言うだろう。だからっ！お前は本当に12才かっ！と。

結局、全ての手続きを終えた今。途方にくれる両親であったが、海人は以外にも冷静であった。

結局は此処か、父の転勤先の学校かどうかしかないのだ。このまま引きこもり、というのも有るには有るが。

そうなる、僕がヒッピー、逆ファミリィタイズ？なんてバカな事を考えていた海人だった。

父に選択肢はない。家族がいる以上働くしかない。

ここで駄々こねて、上の機嫌を損ねるのも宜しくない。

蹴つてもクビにはならないだろうが、左遷は有りえる。そんな事になったらこれから先、どう考えても修正は容易ではない。

左遷なんてさせんっ！つまらないこと言ってサーセン！なんて口が裂けても言えない。

間違はなくクビがとぶ。

結局、家族会議の結果海人一人が残る事になった。

これには猛反対された。当たり前だろう。彼は小学校を卒業したばかりなのだから。

海人は必死に考えた。彼だって男の子なのだ。不安よりも好奇心の方が先に立つ。

何もかもが新しいのだ。土地、学校、生活。夜更かしで小言を言われる事も無い。門限がある訳でもない。色んな可能性が広がっているように思えた。だから彼は必死だった。

だから説得した。

ここは言葉が通じない外国なんですか！無人島でもありません！電話だって有るでしょう！

防犯だってきちんとします！火の後始末は欠かしません！

大人ではないけれど、何も出来ない子供でもないでしょう！僕を信じてくれないのですか……？と。

まくし立てるように矢継ぎ早に言葉を重ねる海人。

両親はこんなに必死な海人を見るのは初めてだった。故に両親は思った。

こうやって段々、親離れして行くのか……と。嬉しさと寂しさ、そして大きな心配。

色んな感情が混ざり合った気持ちだったが、結局は折れた両親だった。

海人は、これで有る程度自由に出来ますね。いや、良かった。二人共学生寮に気付かなくて。考える暇を与えなくて正解でした。と安心していた。

こうして、大いなる勘違いと、ほんの少しの腹黒精神で海人の一人暮らしが決定した。

因みに転勤先はアメリカであった。

そんな人もまばらな教室で、海人は何をやっているのかというと、書類の整理であった。

案の定、このクラスメートは海人以外皆、麻帆良出身であった。クラス担任は早く馴染んで貰いたいが為に、海人をクラス代表に選んだ。と言っても重大な責任を伴う様な役職ではない。精々、提出物等の収集、簡単な教師の頼まれ事等、雑務と言うかパシリと言うか……。

そんな役どころであった。今、整理しているのは簡単な進路希望調査である。

まだ早い気もするが、この時期から学年全体で調査をする事によって、それに合った全体、又は個人の教育指導の指針に役立てる為に使うとか何とか、らしい。

海人も詳しく聞いて居なかった。それもそうだろう。入学したてで、進路もへったくれもない。高校生ならいざ知らず。こっちは、去年までランドセルだったのだから。

ほぼ100%進学に決まってるだろうに。

こんな事を言い出したのは、今年から学年主任になった新田という教師らしい。どんな教師だったか。

そうだ！人の3倍はカルシウムを摂取しないと、沸点が人並みにならない先生だ！

カルシウム・新田だ！両親は日本人とどこの国の人間だ！と言わ

んばかりである。

そんな下らない事を考えながら、海人は書類を纏めた。後は職員室に持って行くだけである。

1学年の男子クラス数は6クラスだ。海人はこの学年の代表生徒だ。男子だけではあるが。

女子は女子で別にいるらしい。それぞれのクラスで代表が一人ずつ。計6人プラス学年主任で学年代表を決めた。

やはり此処でも、海人以外はある程度の顔見知りだったらしい。歴史は繰り返す。中々決まらず、騒ぎが大きくなり始めた所で、カルシウム・新田が大噴火。

その場で彼が、一人輪に加わりきれていない海人を推薦。満場一致で可決。

これが学年主任になって初めてのカルシウム・新田・ボルケーノ事件だった。因みに名付けは海人。

そんな事を思い出しながら職員室に向かう。

各クラスの代表から自クラスの書類を受け取り、何日かに分けて提出してきた。今日が締め切り最終日になっていた。集まりが一番悪かったのが自クラスというのが少し情けなく思う海人であった。

職員質のドアをノックし、失礼します、と入る。きよきよと室内を見回し件の教師を探す。

見つけはしたが、どうやら一人の女生徒と会話をしている。邪魔にならないように少し離れた所で待っていると新田の方が気付き声を掛けてきた。

「おお、重岡か。どうした？」

持ってきた書類を渡す。用件を済ませ帰ろうとすると、

「そうだ、重岡。お前これから少し時間あるか？」

何でしょう？聞くと

「どうやらな、1人提出していない奴がいるんだ。女子なんだが一瞬、自分に不備があったかと思ったが、女子なのでそれは無いと結論づける。」

先にいた生徒は、女子生徒の代表であり、報告してきたのだとか。只自分は、部活があるので処理出来ないらしい。先生たちの方もこれから職員会議があるらしく身動きが取れない。どうしようか、と思っていた所に海人が来たという訳だ。自分に取りにいつてきて欲しいとの事だ。何でも今日中に揃えたいらしい。

予定がある訳ではないし、まあいいか、と請け負った。

早速、依頼を果たすべく女子エリアに移動し校舎に入っていく。目的の教室を探していると後ろから声を掛けられた。

「ちよつとそこのアンタ！何やってんのよっ！」

はい？と振り向くと、2人の女子生徒がこちらに向かってくる。

1人はツインテールでオッドアイ。もう1人は長い黒髪にニコニコと優しいような生徒だった。

何かしましたっけ？と首を傾げていると

「ここは女子校舎よ！何で男子生徒がいるのよ！」

ツインテールの子が鼻息を荒くしている。もう1人が宥めてはいるが。

海人は、ああ、なるほど、と納得し事情を説明する。説明を聞いた二人は納得した。優しいような女の子はニコニコと

「そかそか、大変やな〜」

ウンウン、と頷いている。ツインテールの子は少し気まずそうだった。突っかった事を気にしているらしい。

話していく内に、どうやら2人は目的のクラス生徒というのが分かった。神楽坂と近衛、というらしい。

カルシウム・新田のくだりで3人は笑った。納得できるとの事。

海人は、提出不備の生徒の事は言わなかった。告げ口のような感じがして嫌だったからだ。クラスの代表は、雪広というらしく、いいんちょ、があだ名らしい。

ありがとう、とお礼を言い2人とは別れた。何でも近衛は部活、神楽坂はその付き添いとの事だった。

海人も部活に誘われたが、考えておきます、と無難な返答をして

おいた。

さんぽ部。アドベンチャーな匂いがプンプンする部だった。

さっさと目的を果たすべく教室へ急いだが、件の生徒は既に帰宅。仕方なく雪広という生徒を探し、事情を説明した。彼女は自分の不備を丁寧に詫び、新田教師に謝罪をしに行く、と言っていたが、自分から言っておくから大丈夫だと告げ、職員室へ戻った。入ろうとすると、丁度、会議に行く新田と鉢合わせ。

事の成り行きを報告すると、新田の顔は渋面になった。余りにも眉間の皺が深く、困っている様子なので、海人は、差し出がましい様ですが、自分が彼女の家まで言って回収しましょうか？と提案した。

「本当に申し訳ない。頼めるか？遅くなる様であれば、最悪、朝一になっても構わん。何か有ったら連絡してくれ」

そう言っ、携帯の番号を交換した。この埋め合わせは必ずする、とも。住所を聞き件の生徒の家へ向かう。

住所を頼りに件の生徒宅に着いた頃には、既に日はとっぷり暮れていた。ログハウス調の、おしゃれな感じ。コテージやペンションと言った方がいい様な造りの住まいだった。

チャイムを鳴らす。暫く待っていると

「どちら様ですか？」

耳の当たりにアンテナの様な物を付けた無表情の少女が出てきた。コスプレですか？と海人は思ったが、人の趣味はそれぞれ。口には出さなかった。

「麻帆寮学園男子中等部学年生徒代表1年D組みの重岡海人と申します。マクダウェルさんはご在宅でしょうか？」

長ったらしい自己紹介だと思しながら、丁寧に辞儀をした。

「マスターにどの様なご用件ですか？」

僅かに警戒した様子に答える少女。

マスター？それって何かの罰ゲーム？プレイ？何なんでしょう？首を傾げながら事情を説明した。

暫く黙考し、少々、お待ちください、そう言って戻っていった。

もしかして、勘違いさせてしまったのかも、と思う海人だった。まあ、親御さんが出てきても事情を説明すればいいか、と納得させた。暫くして、扉が開き中へ通される。案内されたリビングらしき部屋には1人の幼い少女が不敵な笑みを浮かべ座っていた。

「貴様は誰だ？何の用があつてここに来た？」

海人の第一印象、カワイイ子だなあ、と思った。

「えーと、君がマクダウエルさんですか？」

海人は確認を取った。

「だから、キサマは誰だと言っている。勝手に人の家に来て、名乗りもしない。ふざけているとしか言い様がないな」

腕を組み、眉間に皺を寄せた。海人は、そうだった、自己紹介が先だったな、自分の失礼に反省した。

「ごめんなさい。麻帆寮学園男子中等部学年生徒代表1年D組みの重岡海人です。先程は失礼しました。改めまして、あなたがマクダウエルさんですか？」

自己紹介と共に丁寧に頭を下げる。

「ああ、そうだ。私がエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ。中々素直じゃないか。キサマの謝罪に免じて、先程の失礼はなかつと事にしてやる」

尊大な態度でそう告げる。カワイイけど、偉そうな喋り方だなあと思う海人だった。

「で、用件はなんだ？下らん事だったら、すぐにほっぴり出すぞ」
やっぱり偉そうだ、と思ったがそんな事はおくびにも出さない。

海人は、ここに訪ねて来た用件を簡潔に述べた。エヴァはそれを聞くと、チツ、と舌打ちをし忌々しそうに、面倒くさいと呟いた。

「それは、今日で無くてはならんのか？」

「何でも、今日中に集めたいらしいです。最悪、朝一でも構わない、とカルシウム……じゃなかった、えーと、新田先生は言っていました」

海人の中では新田Ⅱカルシウムになっており、直に新田の名前が出てこなかった。

エヴァは方眉を上げ、

「何だそのカルシウムというのは」

怪訝な感じで聞いてきた。

海人はその経緯を話すと、エヴァは確かに理解できると笑った。

「それにしても、くそ真面目に見えて、そうでもなさそうだな。キサマ」

ニヤリ、と笑う。

海人は首を傾げ、そうでもないですよ、とうそぶいた。

エヴァは、仕方ない、書いてきてやる、そう言って立ち上がったが、それを止めたのは海人だった。

自分のカバンから用紙を取り出した。此方に来る前に新田から、貰っておいたのだ。

エヴァは僅かに目を見開き、ニヤリと笑った。

「随分と用意がいいじゃないか。え？学年代表殿？」

嫌味とも賞賛とも取れない評価で、面白そうな顔で告げた。

「そうですか？学年でたった一人だけ提出しない人ですからね。無くしている可能性が高い、と思うのは飛躍した考えですか？」

にっこり笑って言った。こちらは明らかにイヤミであった。その物言いに舌打ちをし

「さっさと寄越せ。」

奪うように受け取ると、どっかりと座った。そして、気付く。書く物がないではないか、と。

再度、舌打ちをし、側にひかえる少女に持ってこさせようとした矢先に、目の前にペンが差し出された。

目で追うと、にっこり笑った海人がいた。明らかに自然な笑みではないそれを尻目に、これまた奪うようにペンを取り、書きなぐる様に記入していく。

途中書き損じて、しまったという顔のエヴァに再度新しい用紙が

差し出された。

また奪うように手を出す、サッ、と避けられた。おちよくっているのかと激高しかけたが、海人は柔らかい笑みを浮かべ、「一度、深呼吸しませんか？時間はまだありますよ？ね？」

そう言って冷静になる様促した。エヴァはその柔らかい笑みに、フツと笑い軽い深呼吸をした。

程なく書き終わり用紙を渡す。受け取った海人は、お疲れ様した、と彼女を労った。

用紙を受け取り、立ち上がった海人に、エヴァは声をかけた。

「用件はこれだけだな？」

と念をおした。頷く海人に、なら、さっさと帰るがいい、とやっぱり尊大な態度で帰宅を促した。

玄関まで見送られ、お邪魔しました、と言ったところで、エヴァの側に控えた少女が一步踏み出し、

「何も御もてなしもせず申し訳ありません」

丁寧なお辞儀と共に謝罪をした。海人は、どうぞ、お構いなく、と会釈で返す。エヴァはフン、と鼻を鳴らしたただけだった。

「逢魔ヶ刻はとくに過ぎた。気を付けて帰ることだな」

エヴァは不敵な笑みで、意味深な事を言った。

「逢魔ヶ刻と言うよりも、大禍事でした。」

そう言って笑った。エヴァは舌打ちを、その隣の少女は、すみません、と頭を下げた。

海人は迷ったが、最後にこれだけは言っておこうと口を開いた。

「あの、マクダウェルさん。人には色んな趣味があるので、言いづらいたのですが……なるべくこういったプレイは、人にばれないようにした方がいいと思うんです。」

エヴァは、何言ってるんだ？コイツ、と首を傾げる。

「その、彼女はお手伝いさんなのかもしれませんが、コスプレさせ、マスターと呼ばせ、その自分の優越感を満たすのはちょっとどうかと……」

申し訳なさそうに告げる。エヴァはその大いなる勘違いに

「違うわ！ボケ！勝手に変態にするな！茶々丸は、同じクラスメートだ！」

顔を真っ赤にして怒鳴る。

「マスターと同じクラスの絡繰 茶々丸と申します。自己紹介が遅れて申し訳ありません」

律儀に頭を下げる。

「あ、そうだったんですが。すみません。大変な勘違いをしてしまった。マクダウエルさんも、ごめんさい。変なプレイじゃなかったんですね」

と変態扱いした事を謝罪した。

「分かればいいのだ。分かれば。全く変な勘違いをしおって」

エヴァは溜飲を下げた。だが、次の海人のセリフにまた怒鳴る。

「プレイじゃなくて、邪気眼ごっこだったんですね。大丈夫ですよ。そういう年頃でしょうし、僕にはそういった趣味はありませんが、理解出来なくてもいいですよ。ええ」

やっぱり勘違いしていた海人だった。

「アホかー！キサマわっ！何故私がそんな痛い人間にならなければならんのだっ！」

またしても真っ赤になって怒鳴り散らす。

ええ？違うんですか？と首を傾げる海人。

「違うわっ！ボケっ！何処をどう取ったら、そういう解釈になるのだ！」

「ええ？でもクラスメートにマスターって呼ばせるのってそういう事じゃないんですか？」

「うるさい！キサマには、関係ない！用事が済んだのだから、さっさと帰れ！」

只のクラスメートではなく、ガイノイドにして従者である茶々丸。だがエヴァとしては、何も知らない一般人に説明する必要もないし、するべきではない。

海人も何か事情があるのだろうと思い、深く詮索しない方がいいと思った。

変に深く突っ込んで、嫌われてしまうの嫌だった。

自分がカワイイと思った女の子には誰だって嫌悪感をもたれたくない。エヴァの容姿にしても中1にしては、かなり幼い印象を持ったが、身体的な疾患を持っているのかもしれないし、それを指摘し、差別主義に取られる事は本意ではない。

たまたまカワイイと思った子が、年齢の割には幼い容姿をしていただけの事だ。怒らせてしまった事に罪悪感を感じ、素直に謝罪した海人だった。一応、許してはもらえたが。

そんなやり取りを終え、エヴァの家を後にしながら、新田に電話を掛ける。タイミングよく、会議が終わったとの事で、届ける旨を伝えると、待っているので気を付けて来なさいとの事だった。

陽も沈み、宵の口である時間になっており、海人は一度振り返った。エヴァ宅のきれいな外観がシルエットとして浮かび、僅かに顔を綻ばせ、さ、急いで届けようと早歩きし出した所で声を掛けられた。

「君、その家から出てきたね？ 一体何をしていたのかな？」

その人物は、スーツ姿でメガネを掛けた若い男性教師だった。

何回か見かけた事のある、名前も覚えていない教師。後ろには生徒らしき人物が3人程いる。

セリフだけ取れば何てことないが、その口調には有無を言わせないモノがあった。表情も硬く、海人は、何故か怒られている印象をもった。

「はい。マクダウェルさんに用事がありました。家にお邪魔をさせていただきました。」

具体的には言わない。自分の発言で、この件に関係ない教師に、彼女に対する心象を悪くさせない様、彼なりの配慮だった。それを聞いた男性教師は

「だから、何をしていたのかを聞いているのだ！ さっさと答えろ」

エヴァと同じ様な尊大な口調だが、海人は、この物言いに不快感を感じた。

「ですから、少々、用事がありました。やましい事など何もやっていないですが？」

何故、自分が責められなければならないのか。海人は僅かに不機嫌になる。

「お前、以前には見た事がない生徒だな。何処から来た」

尋問のような口調に、ますます不機嫌になる。何故そんな事に答えればならないのか。今はそんな事関係ないだろに、と思った。

「中学からこちらに引っ越してきました。何か問題でも？それに自分が何処から来たのかなど、何の関係があるのですか？」

海人の口調もきつくなる。それを聞いた男性教師は、後ろにいる生徒に何やら聞いている。海人は、新田を待たせている事もあり、さっさとこの場を離れる事にした。

それに気付いた男性教師は、海人の前に立ちふさがり、

「まだ、お前は質問に答えてない！それから、お前ら2人は、奴の家に向かえ！何としてでも引っ張りだして来い。多少痛い目に合わせても構わん。今日は新月だ。奴も抵抗できんだろうよ」

嫌らしい笑みを浮かべながら、指示を出す教師。

海人は、何を言っているのか全く分からなかった。引っ張り出す？痛い目？新月？脳みそが膿んでいる様にしか思えない。そこで思った。

この教師は一生尊敬出来ないし、ここにいる生徒に対しても友達にはなれない、と。

そして、腹が立った。何か良からぬ事をやろうとしているのでは？と。

「あなたは何を言ってるのですか？仮にも教師でしょう。自分の生徒に対して、奴だとか痛い目に合わせても、だとか。本当に教師ですか？この事は、学年主任の新田先生に報告します。教育委員会に訴えますよ」

そう言って、教師を避け立ち去ろうとする。しかし、今度は1人の男子生徒が立ちふさがった。どうやら高校性らしい。

「お前は、そのまま抑えておけ」

男性教師はそう言い残し、残り2人を引き連れてエヴァ宅の方へ去って言った。

「どいてください。」

睨みながら強い口調で言う。男子生徒はニヤニヤしながら何も言わない。

埒があかないと判断した海人は、避けて素通りしようとした。すれ違った瞬間、いきなり殴られた。

海人はいきなり殴られ地面に転がった。訳が分からなかった。なんなんだ、一体！

起き上がり、見上げた男子生徒はやっぱりニヤニヤしていた。

「お前が悪いんだからな。逃げようとするから」

海人にとって、酷く耳障りな声だった。やっぱり目上でも尊敬出来そうにない、そう思った海人だった。

彼の大禍事はまだ終わらない。

第1話 凡人は逢魔ヶ刻に大禍事に出会う（後書き）

いかがでしたでしょうか？
これから頑張ります。
宜しく願いいたします。

第2話 凡人は大禍事後に魔法と出会う（前書き）

作者のダメ中年です。

第2話お届けです。

駄文です。

今回ダメダメです。

自分なりに頑張ったんですが……。どうしてこうなったのか。

最早、プロット関係なし。こんな主人公じゃなかった筈なんです。

もう、いいです。このまま突っ走ってしまえ！

では、どうぞ。

第2話 凡人は大禍事後に魔法と出会う

殴られた海人は、混乱した。いきなり殴られるような謂れはないし、自分が悪いとも思わない。

殴られた箇所はジンジンと痛み、口を拭うと拭った手に血が付着し、鋭い痛みが襲った。

混乱覚めやらぬ中でも、何とか落ち着こうと、深呼吸をする。喧嘩の経験は数える程しかない。

海人は思案した。まずは落ち着いて、この状況をどう打破するか。辺りに助けを求められる人はいない。

どうする？ 携帯を使うか？ いや、ダメだ。携帯を取り上げられたら終わる。

立ち向かうか？ いや、恐らく負ける。向こうは高校生。身体的スペックが違う。

逃げる。それが最善。でもどうやって？ 普通に逃げても追いつかれる。追いつかれない状況を作るには？

そう思案していると、ゆっくりとその男子生徒は近づいてきた。

「ほら、さっさと立てよ」

そう言いながら足先で小突いてくる。

海人は、その仕打ちに腹が立った。あまりにもバカにしすぎではないか。自分が一体何をした？

「どうした？ ビビッて動けねえか？ だせえ」

「僕が何をしたって言うんですか！」

男子生徒は睨みながら、

「ああ？ 手前えには関係ねえよ。何も知らねえガキは引っ込んでろ！ 大体逃げようとするから悪いんだよ！」

関係ないのに殴られた？ 引っ込んでろ？ 逃げようとするから悪い？ 相手の物言いにかッとなった。さっきまで逃げる事を考えていたが、その考えはすっ飛んだ。

よし、いいでしょう。理不尽な暴力を振るった相手には相応の報いをしなければ。海人の決断は早かった。

海人は、どちらかといえば平和主義者だが、理不尽に暴力を振るわれて、黙っている程お人好しではない。

無駄な争いは好きではないがヘタレでも腰抜けでも無かった。

そうと決まれば反撃だ。相手は油断している。ビビッて動けないと思い込んでいる、反撃は無いとタカをくくっている。

そうと決まれば、このまま油断させておくのが吉。

タイミングを見計らい、隙を突いて一気に畳み掛けるが重畳。そう判断した海人の行動は早かった。

下に俯き鼻を鳴らし、目元を拭う。泣いている振りをしながら、ゆっくり立ち上がるとする。

相手の失笑が聞こえた瞬間、緩慢な動作から俊敏な動作に移した。小突いていた相手の足首を、両手で掴み、立ち上がりながら持ち上げる。虚を付かれた相手はぐらついた。

すかさず片方の足に足払いをする。見事に倒れた相手は背中と後頭部を打ち悶絶した。

間髪いれずに、相手の鳩尾目掛け足を振り下ろす。体重の乗った踏み込みがヒットした。

お腹を押さえまともや悶絶している相手に、今度は顔面目掛け足を振り下ろす。パツと鼻血が舞った。

止めとばかりに、おもいきり相手の顎目掛けてトゥーキック。流れるような一連の動きであった。

顎とまともや後頭部を強かに打ちつけられた相手はぐったりとなった。それを見た海人は肝を冷やした。

まさか、死んでいないですね。どうやら息はしている様だ。ほっと息をつく。

カッとなってやってしまった。反省も、後悔もしていない。ちょっとやりすぎた感はあるが。

正当防衛の範疇ですよ。うん。そう結論付けた。

さて、どうしようか。まず、報告しなくては。携帯を取り出し電話を掛ける。すぐに新田に繋がった。

経緯を報告する。新田はかなり吃驚していた。男性教師の容姿を伝えると、休みを取っている教師との事だった。

自分はマクダウエルさんの家に行きます、と述べ返事を聴かずに切った。

返事を聴かなかったのは止められると思ったからだ。海人には行かなければならない、漠然とそういう想いがあった。

何故だか分からない。何かもやもやするのだ。

その後すぐに匿名で救急車を呼び、気絶している彼を回収して貰うよう依頼した。

そしてエヴァの家に進めた。

急いで駆けつけると、そこには不穏な空気が渦巻いていた。

家の前でエヴァと茶々丸に対し先程の教師含めた3人が対峙していた。それはいい。

だが、おかしい。明らかにおかしい。

何故、この教師はナイフとモデルガンを持っている？

何故その男子生徒も同じナイフを持って構えている？

隣にいる女子生徒が持っているその大きな杖みたいな物は何ですか？

それに対し、腕を組み悠然と佇み不敵な笑みを浮かべるエヴァ。

その隣で、何やら構えている茶々丸。

海人はこの状況に着いて行けなかったが、突如閃いた。

ヒントは有ったじゃないですか。強く否定していたが、そういう事なんですね。しかし、さっきのもやもやは何だったんでしょう……？ま、まさか！そんな！僕にそんな願望が有ったなんて！

認めなくてはいけなのでしょうか……？否！断じて否！これだけは認める訳にはいきません。

ですが、ここにいる人たちの事是否定してはいけませんよね。ならば、自分は暖かく見守りながら事態の收拾に力を注ぐとしましょ

う。

新田先生にも報告してしまったことですしね。新田先生が知ったら、ボルケーノ処じゃ済まないでしょう。

しかし、教師が休んでまでやる事ではないでしょうに。全く。

すばやい思考の後、海人は意を決して一步を踏み出した。

「マクダウェルさん！」

その一言に一齐に5人は海人に目を向けた。

エヴァと男性教師は目を見開き、生徒2人は困惑した。変わらな
いのは茶々丸だけだった。

予想外な人物の登場により、一同は困惑した。一番立ち直りが早
かったのは、声を掛けられたエヴァだった。

「キサマ、どうして此処に戻ってきた！帰ったんじゃないのか
！」

あまりの剣幕に辟易していると、

「お前が何故ここに来る！安田はどうした！」

男性教師は眉根を吊り上げ激昂した。

ああ、あの安田って言うんですか。知りませんでした。当たり
前ですけどね。

気絶させました、とは言えず、どう誤魔化そうかと思案する。上
手い誤魔化しが思い浮かばなかったので、事実のみを告げる。

「救急車で、病院に搬送されました。僕は事態を収拾する為に此処
にきました。既に他の教師にも連絡済みです」

確かに事実しか言っていない。そのセリフにそれぞれが困惑した。

2人の生徒は、病院に搬送のくだりで、何が有った！と。

エヴァは、事態の収拾のくだりで、お前一般生徒じゃなかったの
か！と。

男性教師は、他の教師への連絡というくだりで、余計な事を！と。
海人は、ついている隙を与えないように一気にまくし立てた。

「マクダウェルさん、先程の件ですが、勘違いではないじゃないで
すか。恥ずかしがらなくてもいいんです。僕はあなたの味方になり

ます。言ってくれば時間さえ合えば幾らでも付き合いますからね？先生まで巻き込むのは流石にやりすぎです。それからそのお2人、先輩なんですから、後輩に対してちゃんとアドバイスしなくちゃダメじゃないですか？付き合って上げる事は後輩想いだとは思いますが、優しいだけでは駄目です。時には厳しさも必要です。特に僕達ぐらいからの年代は。それから先生。あなたは何をやってるんです？先程も言いましたが、仮にも教師でしょう？仕事を休んでまでやる事ではないはずです。給料泥棒などと後ろ指差されても知りませんからね。指導もちゃんとやってください。いきなり殴りかかってきましたよ。全く。もう少しで連絡した教師が来ると思います。しっかり弁解してください。皆さん、いいですね」

ここで、ふー、と息を付く。自分が1人の生徒を伸した事を棚に上げて、堂々と言い放った。

勘違いここに極れり。

茶々丸以外の4人は口をあんどりと開けた。

皆思うことは一緒だった。お前は一体何の話をしているんだ！と。

「キサマは、何を勘違いしている！全く意味が解らんぞ！」

またしても一番立ち直りが早かったエヴァが声を荒げる。

海人は、あれ？何か間違っていました？と言わんばかりに首を傾げる。

「お前、一体誰に連絡したんだ！言え！どうして休んでいる事を知っている！」

慌てた男性教師も声を荒げた。

「そんなの決まっているじゃないですか。学年主任の新田先生です！」

自信満々に言う。んなあ！異口同音に言葉を発する。茶々丸は変わらなかったが。

男性教師は思案した。新田と言うのが少々厄介だが、まあいい。所詮は一般人。

そもそもの目的はエヴァンジェリンの排除に伴う自分の名声上昇

と懸賞金。問題はない。

イレギュラーが舞い込んだが、何の力もない一般生徒。計画に變更はない。

新田が来る前に全員殺してしまえばいい。イレギュラーはエヴァンジェリンが殺した事にすればいい。

そう結論付ける。だが彼は欲に目がくらんで気付いていない。

新田に知れた時点で一般、魔法に関係なく全ての教師陣に話が回っている事を。

既にこの件に関しては詰んでいる事を。

「まあ、新田なんぞどうでもいい。おい、お前らさっさと片を付けるぞ。」

指示を出しながら、自分も構える。再び不穏な空気が流れ始めた。これに慌てたのは海人だった。上手く収集できたと思った矢先の事だったので困惑した。

まだ続けるの？この邪気眼ごっこ。未だに勘違いが解けていない海人は男性教師に声を掛けた。

「ちょ、ちょっと先生。待ってください。こんな事している場合ではないでしょう！」

男性教師は、煩わしそうに銃口を海人に向けた。

「お前は邪魔だ。取りあえず死んでろ」

その事にいち早く反応したエヴァは、茶々丸！と一言掛け、自分は魔法薬を取り出す。

茶々丸は海人の襟首を引っ張り、力任せに射線から移動させる。

瞬間、海人の頭が有った所には、銃声と共に放たれた弾丸が通過した。

引き倒された海人は激しく混乱した。

え？なに？なに？今の？本物っぽくないですか？っていうか本物なんですか？どういう事？

ここに来て、漸く自分がとんでもない勘違いをしているのではないかと思に至る。

心臓が早鐘の様に打ち、喉がカラカラに渴いていく。一瞬にして極度の緊張状態に陥る。

呼吸は荒くなり、手が震えだす。

「バカモノが！ぼうつとしてないで、さっさと逃げろ！茶々丸、教師の方は任せた！」

エヴァに声を掛けられはつとした。そうだ逃げなくては！殺されそうになったのだ。早く逃げなくては！

急いで立ち上がり駆け出す。少しした所ではた、と気付く。

1人で？2人を置いて？女の子を置いて逃げ出す？冗談じゃない！それだけはやってはいけない！

重岡海人はそこまでチキンじゃない！殺されそうになったとしても！

両親に、何も出来ない子供でもない、と言い切ったのは自分じゃないか！そう思い自分を奮い立たせる。

振り返ると海人にとって有りえない物が飛び込んできた。

何ですか！何なのですか！アレは！有りない！

あれではまるで……そう、魔法みたいじゃないですか……！

氷の矢が飛び交い、炎が舞う。御伽噺やゲームの世界。ファンタジーな出来事に眩暈を覚える。

僅かに瞠目し、頭を振る。そんなのは後だ。今は、自分だけ出来る成すべき事を。海人は深呼吸をした。

どうやら皆は、自分に気付いていない様だ。逃げたと思っている。焦るな。観察しろ。

ゆっくりと移動する。

見ているとどうやら、あの摩訶不思議な現象には呪文が必要なようだ。

あの男性教師は絡繰さんに翻弄されている。マクダウエルさんは、男子生徒と女子生徒を相手にしている。

不思議現象を使いたいが男子生徒に接近され、途中で断念。

男子生徒に接近を挑むも、女子生徒の不思議現象に攻め切れない。

よし。自分のターゲットはあの女子生徒。自分に一番近い位置で、杖しか持っていない。

彼女を無効化しつつ、他の人間の動揺を誘うがベスト。

どうやって無効化と動揺を誘う？手元に武器はなし。近くにも武器になりそうな物もなし。

時間はあまりない。誰かに気付かれた時点でアウト。

まずはあの杖を取り上げるのが先か？呪文を中断させるのが先か？同時に行うには？

口を塞ぐ？無理。背後に回り込む余裕はない。

体当たりでもするか？リスクが高い。失敗したら確実に反撃される。

先に動揺を誘うか？いや、違う。同時がベストだが、優先すべきは彼女の方だ。

どうする？どうすればいい？考えろ！考えろ！思考を停止させるな！

逸る気持ちを抑え思考の海に沈んでいく。

瞬間、閃いた。これなら多分イケル。しかし！それは許されるのか？

ある意味、暴行、殺人よりも不味くないか？仕方ない。後で土下座しよう。許してくれるはず。多分。

数瞬の内覚悟を決める。そうと決まれば、後はタイミングのみ。彼女が呪文を唱え始めたら、即行動。

行きます！N o b o d y c a n s t o p m e ! !

コメディ映画、緑の仮面を手に入れた数奇な男の運命のセリフをリスペクトする海人。

体勢を低くしながら、現状、考えうるベストなポジションに付く。後は待つのみ。

そして、その瞬間は程なく訪れた。

その女子生徒は詠唱を開始した。海人の位置からは丁度、死角になっている。

海人は、好機！とばかりに飛び出した。ダッシュをしながら、後、数歩の所で声を上げる。

「ごめんなさい！」

その女子生徒は反射的に海人の方に目を向ける。海人は心の中でもう一度謝罪した。

そして、徐に彼女のスカートを捲り、あまつさえ、胸に手を当てその女子生徒の胸を揉んだのである。

「キャー！」

悲鳴を上げ、詠唱は中断。胸を隠しスカートを抑える。同時に杖を落とした。

それを見た海人は素早く杖を拾いバックステップ。

その光景に茶々丸含め、哑然。何とも間抜けな作戦ではあったが効果はあった様だ。

ベストではないが、現状、海人の実力ではこれが精一杯だろう。

海人は間髪いれずに

「絡繰さん！マクダウェルさん！」

と声を掛けた。

いち早く復帰した2人は、まだ立ち直っていないそれぞれの相手に強烈な一撃を入れ沈めた。

残った女子生徒は、オロオロし始めた。それもそうだろう拮抗していた状態が、一瞬の内にこの様な状態に為ってしまったのだから元々この件に関しては、乗り気ではなかった。なら、何故参加したのか？

それは、少し好意を寄せていた男子生徒に誘われたからだだった。一緒に悪を排除しよう。お前がいれば心強い。終わったらデートしようぜ！と。この誘いに落ちた。

そういった経緯でこの場に居合わせたのだ。

好意を寄せていた彼は病院に搬送されたいし、知らない下級生にスカートを捲られた挙句に、胸まで揉まれたのだ。

そして急に四面楚歌の状態。何が何だか解らなくなって、ついに

は泣き出した。

泣き出した彼女を拘束しだす茶々丸。

海人はその様子に、あちゃーと頭を抱えた。えーと、どうしましよう？やっぱり土下座ですよね。

しかし、まさか泣かれるとは……。これは流石に想定外です。

そんな事を考えていると、エヴァがつかつかと寄ってきて

「キサマは！一体！何を！やっとなるんだー！アホか？アホなのか？逃げたと思ったら、戻って来ていきなりセクハラ！ほんつとに訳分からんわ！」

かなりお怒りのようだ。しかし、海人は冷静に

「仕方ないじゃないですか。マクダウエルさん達残して逃げるのは嫌だったし。かと言って、僕には不思議現象なんて起こせないし。

この状況で自分が出来る最善を考えた結果がアレなんですよ？現に上手くいったじゃないですか。それに、言っではなんです、あんな事好きでやったわけじゃないんです」

その物言いにエヴァは気が付いた。

そうだった。コイツは一般生徒だ、と。

この後の処理をどうするか考えていると、銃声と共に海人に押し倒された。

何が起こった！エヴァは海人を見た。瞬間理解する。海人は自分を庇ったのだ。

何たる不覚！この闇の福音ともあろう自分がこんな下らない失態を犯すとは！

茶々丸に指示を出すよりも早く、件の原因の教師は吹っ飛ばされた。

吹っ飛ばした人間を見て、僅かに警戒を解く。そして海人に目を移した瞬間固まった。

海人が肩を抑えながら、声にならない悲鳴を上げていた。顔は真っ青で、目をギュッと瞑り、小刻みに震えている。

エヴァは慌てて声を掛けた。

「おい！大丈夫か！しつかりしろ！」

海人は返事が出来なかった。経験のない未曾有の激痛に、パニックになっていた。思考が定まらない。

痛い！痛い！痛い！肩が焼ける様に痛い！それしか考えられなかった。

「タカミチ！生徒が撃たれた！治療できる奴を早く連れて来い！モタモタするな！」

怒鳴り散らす様に大声を上げる。

タカミチと言われた男は、慌てて1人の女性教師を伴い駆けつけてくる。

海人は何が何だか解らないまま、その女性教師のされるがままに治療を受けた。

未だ思考が定まらない。何だか夢の中にいるみたいだ。

でもこの激しい痛みは、リアルを容赦なく突きつけてくる。

痛みが段々引いていき、完全に収まった所で、漸くまともな思考が出来るようになっていた。

ふと辺りを見回すと、そこにいる殆どが自分に目を向けていた。

何か言わなくては、と思った所でエヴァから声が掛かった。

「大丈夫か？」

立った一言。だがその一言は、彼が今日聞いた彼女の声の中で一番優しい声音だった。

何故だか安心できた。コクと頷く。

「落ち着いた処でいいかい？えーと、重岡君と言ったっけ。大丈夫そうなら、このままちよつと学園長室まで着いて来てくれるかな？ああ無理にとは言わないよ？どうだい？」

そう声を掛けてきたのはタカミチと呼ばれた人物だった。

悪い人物ではなさそうですが……何か釈然としないんですね。こんな怪我した後なのに。治ったからいいとでも思ってるのでしょうか。それが彼に対する第一印象だった。

こんな事があった今、海人は軽い人間不信に陥っていた。

教師が生徒を、躊躇なく殺そうとしてきたのだ。普通なら考えられない。あの不思議現象の事もある。

こんな教師をのさばらせておく学園にも不信感が募る。

その学園の長。きつと会え、ということなんだろう。

海人は、深呼吸をした。自分を落ち着かせた。大丈夫。不思議現象でもう痛みはない。

冷静にならなくては。何度も深呼吸を繰り返す。よし、大丈夫。

さて、このまま着いて行くのが吉か？それとも体調不良を理由に辞退するのが吉か？

行く？取って食われる事はないと思いますが……。

この事の説明だけなのでしょう。自分以外、然程驚いている様子もないですし。

ということとは、仕組まれていた？有りえないですね。自分の行動は予測が付かなかったはずでしょうし。

となると……ここで説明がないというのは、最終的な決定権は学園長にありますね。だとすれば、学園長は間違いなく、この事の関係者でしょう。

首謀者という事もありえます。しかし情報が少なすぎます。何をするのか、されるのかが検討が付きません。脚下です。

辞退した場合は？恐らく明日には呼び出されますね。考える時間は増えますが、1人暮らしですし。

仮に学園長が首謀者だった場合、これは非常に危険ですよ。

自分の事など簡単に調べられるでしょうし。家に居るは下作。

満喫などはどうでしょう？自分の年齢では無理ですね。追い出されます。

警察に保護……？駄目です。信じてくれないうし。撃たれたといっても、あの不思議現象で傷がありません。

困りました。どちらを取ってもジリ貧です。

最善は、必要な情報を取得しつつ時間を稼ぐ、ですね。恐らく情報収集時間は……今の時間からすると1時間が限度。

僅かな時間で情報収集するには……？やっぱりに聞くのが1番でしょう。しかし、自分が信用できる人物でないと……そうなる……。うん。この線でいきましょう。考えを纏めると海人は口を開いた。

「え、えーと、ちょ、ちよつと、その色々ありすぎて……。少しだけ、あの、その、休ませてくれませんか？何かちよつとだるい様な感じというか……。す、すみません。ダメですか？」

オドオドして言い出した。

その時にチラッとエヴァを盗み見るように見た。一瞬だがエヴァと目が合った気がした。

「うーん、そうか。じゃ明日にするかい？体調もよくなさそうだしね。」

そう言って微笑んだ。

いえ、少し休めば大丈夫です。といいながら、俯きながらエヴァを盗み見た。エヴァは薄く笑っていた。

「タカミチ、少し休めば大丈夫だと言ってるだろ。まあ、コイツには助けられた恩もある。ウチで少し休ませてやる。少ししたら一緒に行ってやるよ」

「そうかい？じゃ、頼むよエヴァ。じゃまた後でね重岡君」

そう言って他の人間を引き連れて去って行った。

海人がほっとしていると、エヴァが、早く来い！と促した。

海人は、取りあえず第一関門は突破しましたね、と胸をなでおろした。

リビングに通されると、エヴァはどっかりと座り、海人にも座るように促し、茶々丸に茶の用意をさせた。

エヴァは優雅に足を組み見定めるような視線を送った。

「で？少しは落ち着いたか？学年代表殿？」

おどけたように言う。

「ええ。もちろん。」

「言いたい事は山ほどあるが、先ずは礼を述べておこう。助かった。」

礼を言う。しかし、お前も悪いのだぞ？のこのこ戻って来たのだからな。責任の半分はお前にもあるのは分かっているな？」

ギロリ、と睨みつける。

海人は苦笑し、ええ。もちろん、と自らの非を認めた。

「で？聞きたい事があるんだろう？答えられる範囲で教えてやる。感謝しろよ？これで、貸し借りな無しだ。いいな？」

有無を言わさない口調だった。

海人は思った。態度も口調も尊大だけど、何故か不快感がわかないな、と。

さて、情報収集を始めるとしますか。時間は有限。ここから第二関門ですね、と。

先ず、海人は先ほどの不思議現象について聞いた。ほぼ予想通りの答え。

それを踏まえた上で、質問していく。エヴァはそれに答えられる範囲で返答していった。

きっかり1時間を費やし、エヴァ宅を後にした。

エヴァ、茶々丸の3人で学園長室へ向かう。エヴァはこの道のりの間、終始笑みを浮かべていた。

程なく学園長室に着く。エヴァは目線でいいか、と促す。

海人は軽く深呼吸する。ここから、最終関門。さて、気合入れていきましようかね。

力強く頷きエヴァと共に入って行く。

室内には、学園長をはじめ、タカミチと呼ばれた教師、他、数人の教師が待っていた。

先ず最初に声を掛けたのはタカミチだった。

「やあ、体調はもう大丈夫かい？」

そう言っただけで座るように促した。

失礼します、と挨拶をし座る。

エヴァに聞いた人物像通りの人間達がいた。予想通りの展開だった。

「重岡君、災難だったのう。でももう大丈夫じゃ。何も心配いらんわい。」

好々爺然とした表情で語りかける学園長。

海人は、おどおどした態度で、重岡海人です、と会釈をする。

「早速じゃが、いいかの？」

海人は小さく頷いた。

「今日の事は、既に高畑君から報告を受けておる。重岡君は、エヴァから何か聞いたかの？」

いいえ、それ処ではなかったです。と小さく返した。

その後の魔法関連の説明はエヴァと殆ど同じであった。

「大体の事は理解できたかの？」

はぁ、と生返事を返す。

「それでじゃのう。本来ならば何も知らない一般人には忘れてもらうのが常なんじゃよ。しかし、聞くところによると、魔法生徒を2人も倒しているそうじゃないか。誰にでも出来る事ではないぞい。その素質を活かして、麻帆良に住んでいる人達の為に役立ててみてはくれんかのう。この通りじゃ。力を貸しておくれ」

そう言って学園長は頭を下げた。

何人かの教師は、学園長に反対する。

彼はまだ子供です！とか、態々必要ないでしょう？一体誰が指導するのですか？などなど。

学園長が諫めて答えを聞いてくる。

海人の出した結論に学園長は瞠目した。

海人は一言、強い意志を込めてこう言った。

記憶を改竄して下さい。と

第2話 凡人は大禍事後に魔法と出会う（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ええ、作者一番解ってます。

感想、アドバイス、暇だったらお願いします。

次回、ガンバリマス。

お読み頂き有難うございました。

第3話 凡人は魔法を忘れ再び魔法に会う（前書き）

作者の、ダメ中年です。

皆様にお詫び申し上げます。

タイトルに語弊あります。

主人公、凡人じゃねえ。どうしてこうなった！

主人公、作者の手を離れました。とまらねえ。はい。

こんなキャラじゃなかったんです。最初。

もうどうなるか作者にも予測が付きません。

それでも暖かく見守ってください。

では、どうぞ。

第3話 凡人は魔法を忘れ再び魔法に出会う

海人の朝は以外と早い。この年で1人暮らしをしている人間は少数だろう。

その少数の中でも規則正しい生活を心掛け、尚且つ実行している者など皆無に近い。

海人は、6時半には起床する。朝シャン、朝食を済ませ、火元の確認。

アメリカにいる両親へ登校前に電話をして家をでる。

毎朝の電話はこの生活をする為のルールの一つだった。

面倒くさい、とは思うが仕方ないと割り切っている。

この年で1人暮らしを許されているのだ。これぐらいは当然だろう。

今日も同じサイクルで戸締りをし、家を出る。

海人は空を見上げた。

うん。今日も快晴。いい一日になるといいですね。

海人は何事にも余裕を持って行動するタイプだった。

家を出るのも少し早め。校舎までの道のりを、ゆっくりゆっくり歩いて行くのが日課だった。

その日1日をどう過ごすか。登校しながら考えを巡らすのが気に入っていた。

しかし……この手紙一体何なんでしょう？

今朝、郵便受けに入っていた奇妙な手紙を取り出す。

どこかの住所が書いてあり、その下に『本日18時、上記住所にて待つ、他言無用』

たったそれだけしか記載されてない手紙。

差出人の名前も無し。宛名は確かに自分。

今時、果たし状でしょうか？誰かに恨みを買う様な事しましたっけ？

それとも告白でしょうか？いやあ、モテル男はつらいですねえ。文面的には、果たし状気味。しかし自宅のポストだ。直接乗り込むか、直接呼び出した方が効率的。

だが、告白にしては、かなり硬い文章だ。海人は思案した。なるほど、と手を打つ。

きつと、ものすごくシャイなんですね。かなり初心な子なんですよ。どんな子なんでしょうか。

楽しみです。1人暮らしで良かった。父さん、母さん、重岡海人は今日、大人の階段を一段上るようです。

海人の中では既に告白という事になっていた。

果たし状だと思って1日憂鬱な気分で過ごすより、告白を想像しながら過ごす1日の方が、精神衛生状遥かにいい。

最悪の事を考え、多少の武装をして行きましょう。そう結論付けた。

海人には無視するという考えは、微塵もなかった。

しかし、客観的に見れば、海人の考えはただの妄想にしか思えない。

それでも、武装していく強さは持っているが。

それでも海人にとっては一刺激な1日になる事は間違いないだろう。いい、悪いは別にして。

面白い1日に成りそうだと思う海人だった。

学校の授業も滞りなく終わり、寄り道せずに帰って家に着いたのは、夕方だった。

シャワーを浴び、小奇麗な服にそでを通し、いざ出陣！と竹刀袋を持つ。

何故か家にある木刀を持ち意気揚々と家を後にする。

何でも、父親は昔に剣道をしていた事があったらしい。興味がないので詳しく聞いてはいないが。

そうだ、ケーキでも買っていきましよう。しかし、何人家族なのでしょうか？

多分ご自宅ですよ。適当に買って行きましょう。

途中でケーキを買い、件の住所に着いたのは、指定の15分前だった。

いや、何ともお洒落なお家じゃないですか。ペンションみたいですね。

ちょっと早すぎでしょうか？がつっている様に思われるのも何ですし、少し時間を潰しましょうか？

そう思案していると、玄関が開いた。

中から、茶々丸とエヴァが出てきた。

どちらが、手紙をくれたんでしょうか？うん。金髪の子だったら、嬉しいですね。

海人はどぎまぎし、パツと姿勢を直し挨拶した。

「初めまして。麻帆良学園中等部1年D組みの重岡海人と申します。本日はお招き頂き有難うございます」

笑みを浮かべ挨拶する。その挨拶にエヴァは喉をククツと鳴らせ「ああ、知っているとも。何せ一週間ぶりだからな。学年代表殿？」

ニヤリと笑った。

はて？一週間ぶり？初対面ですよねぇ？それとも、自分を前から見つけていたんでしょうか？

海人のエヴァに対する第2印象はカワイイけど、何か変わってるなあ、だった。

件の事件から1週間がたっていた。

リビングへ通された海人は困惑していた。

まあ、座れ、と促されて座る。

「やっぱり、良く分らん奴だなお前は。洒落た格好に竹刀袋とケーキ？」

エヴァは首を傾げている？

海人は取りあえずケーキを差し出した。エヴァは怪訝な顔になりながらも受け取った。

海人は先ず、用件を聞こうと思った。

心の準備はOK！僕は、どんな告白も受け止めて見せます。ドンと来い！

「この手紙をくれたのは、君でいいんでしょうか？」

気合を入れて聞く海人。エヴァはその気迫に押されながらも、

「あ、ああ、誰にもこの事は言っていないな？」

と念を押す。ええ、もちろん、と返す。

僕は、空気が読める男なんですよ！

そんなに恥ずかしがらなくても大丈夫ですよ？想像どおりシャイな子だなあ、と思った。

「先ず確認をさせろ。キサマは一週間前、新田に収集した進路調査表を提出したな？その時何か依頼されただろう？その後キサマはどのような行動を取った？」

意地の悪い笑みを浮かべ聞いて来る。海人は予想外の問いに必死に記憶の糸を手繰り寄せた。

「えーと、1人分の書類不備の処理を頼まれて……でもその子はいなくて……それを報告しに行った矢先に……確か……そうだ高畑教師が、その子の書類を持ってたんでした。」

「で、お前はそのまま帰宅した。そうだな？」

海人は思い出しながら、ええそうです、と相槌をうった。

それを聞いたエヴァは、大きく笑った。

海人には、訳が分からなかった。自分の行動に笑う要素などないはずだ。

ひとしきり大笑いをしたエヴァは、

「全く、大した奴だよ！お前は。今までの経緯を全てジジイが聞いたら何としても、お前を学園側に引っ張ろうとするだろうよ。」

お前は自分で凡人と言ったな？ああ、そうだ。お前は確かに凡人だよ。

血筋、容姿、魔力量、気の多さ、全く以って凡人だ。だが、一つだけ誇っていい！

お前のその最善を導き出す思考力は正に秀逸だ。この、闇の福音

が保証してやる！喜べ！」

そう言ってまた笑い出す。海人はさらに困惑した。何を言ってるのか解らない。

「ああそう言えば、今のお前には自己紹介が、まだだったな。エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ！宜しく、学年代表殿？」

ニヤリと笑って自己紹介をした。

「フン、では本題に入ろうか。先ずは黙って聞いておけ。」

告白じゃなさそうですねえ、と思った海人だった。

言外に、口は出すなよ？と匂わせる。その有無を言わせない口調に、首肯する事で同意する。

エヴァはその日の出来事を淡々と述べていく。

聞き終える頃には出されたお茶がすっかり冷え切っていた。

聞き終えた海人は、目を瞑り黙考する。たっぷり時間を掛け内容を整理して行く。

目を開きエヴァを見据え口を開いた。疑問があります、と。

言ってみろ、と顎をしゃくるエヴァ。

「今聞いた事が本当だと仮定するとして、何故僕の記憶が改竄されているのか？それを決めたのは誰か？最後に僕が此処にいる理由は？」

虚偽は許さない、と目が語っていた。それを受けエヴァはニヤリと笑った。

その答えを知る為には、エヴァ宅での1時間の会話が全てである。先ずはこれを聞いてからだ。そう言って、レコーダーを取り出しスイッチを押した。

エヴァから魔法の存在、麻帆良の裏に関する事柄を聞き、ため息を漏らす。

あくまでも彼女からだけの情報。

全て鵜呑みにするのは危険だが、現状一番信用出来て頼れるのは彼女のみ。

海人は、自分の目を信じた。そしてエヴァにレコーダーを借りた。エヴァは首を傾げた。

スイッチを入れ録音し始める。

「僕は、今の所マクダウェルさんが一番信じられると思っています」
そう言って、今日有った出来事に対する自分が何を推察し、思考し、行動したかの結果を余す事無く、正直に述べた。

エヴァはそれを聞いて、目を見開き、ほう、それで？と先を促した。

海人はこれからの学園長側の行動の予測を述べていく。

「学園長は、多分僕をそちら側へ勧誘するでしょう。」

何故なら、魔法の秘匿を第一に考える魔法使いが、記憶の改竄を出来るにも関わらず、無理やり連れて行こうとしませんでした。後で幾らでも改竄出来ますしね。

本来ならその場で改竄するのが一般的だと思います。

この事から僕をそちら側に引き込もうとする魂胆が見え見えます。そして、時間的な猶予を与える、と選択肢も出したのは印象を悪くさせない為。

行動を起こそうとしてもきつと無理でしょう。監視していそうです。

そして、僕の経歴と現在1人暮らしをしている点。

僕は魔法関係者を連想させる土地にいた事ありません。

敵対組織の息が掛かってなさそう、もしくは、簡単に都合のいい洗脳が出来そう、など。

祖父母は此処に居ましたが既に他界済み。

例え、何かがあっても手元に置いておく方が監視しやすいでしょうしね。

そして最大の理由……僕に何かあっても都合のいいように処理出

来ます。

捨て駒に使っても事故として押し通せる。何せ1人ですし」

飛躍した考えですか？と言い、そこで一息いれて出された紅茶で唇を湿らす。

エヴァはニヤニヤ笑いながら、それでお前は どうするんだ？と先を促す。

海人は、お願いがあります、とエヴァを見つめる。

エヴァは、取りあえず言ってみろ、聞くだけ聞いてやる、と。

「僕は記憶を改竄してもらおうと思います」

それを聞いてエヴァは失望した。何だ見込み違いか、と。

「但し、そちら側に行き、魔法生徒として動きます」

エヴァはその物言いに矛盾を感じた。どういう事だ？理解が出来なかった。

「僕は記憶を改竄してもらう様にいます。そして、マクダウエルさんは時を見て僕を呼び出してください。

きっと、呼び出した僕の記憶だとマクダウエルさんとは会った事がないはずです。

今日僕は、此処にきていない。この記憶なら僕と新田先生の記憶を弄るだけで済みます。

僕は……そうですね。マクダウエルさんに会う前に新田先生に接触しているので、多分その時に実は書類が有ったとか、クラス担任の先生が実は持っていた、なんて記憶に改竄されているんじゃないでしょうか。

この辺は自信ないですけど。そして、僕に真実を教えてください。僕は今の所、学園長が信用出来ていません。

記憶を改竄したとなれば、むやみな接触はしてこないでしょう。よっぽどの事がない限り。だけど真実を知った今、なかった事にするなんてしたくありません。

しかし僕は、何の力も持っていない只の凡人です。だから、お願いします。協力してもらえませんか？」

そう言って頭を下げた。

エヴァは、重岡海人に興味を持った。

こいつは、善に見えて悪だ。自分の信念の為なら、平気で騙すし、嘘を付く。

そして強い意志持って進んでいく。

面白い、全く以って面白い。いいだろう！協力してやろうじゃないか！

「いいだろう！協力してやる！感謝しろよ。しかし、あのジジイが
どういう反応をするか楽しみで仕方ないな！」

高笑いをするエヴァ。

海人は最後にこう言ってスイッチを切った。

「少し未来の僕へ。どうか信じて欲しい。そして今の僕と同じ気持ち
になってくれる事を願うよ。」

最後に、どうしても信じられない場合の事を考えて保険を掛けて
おきます。

正解すれば絶対に信じられる魔法の質問と答えを紙に書いて、マ
クダウエルさんに渡しておきます。

最悪その方法を試してください。では。未来の重岡海人へ。過去
の重岡海人より」

海人は、メモに何かを書き込み嚴重に折りたたみエヴァに渡した。
その時まで絶対見ないでくださいね、と念を押して。

それを受け取ったエヴァは、ふと気付いたように

「しかし、お前が信じて魔法生徒になるのは別に構わんがな？一体
誰に指導を頼むのだ？」

海人は、目の前にいるじゃないですか。一蓮托生ですよ？と悪戯
っぽく笑った。

それを聞いたエヴァは目を見開いた後、苦笑し仕方がないとか
ぶりを振った。

これが一週間前の真実であった。

最後まで聞いて、エヴァはスイッチを切った。

海人は全てを聞き終え、俯き頭を抱えていた。

エヴァはその様子に、流石にシヨックだったか、と結論付け暫くそっとしておいた。

暫くして海人が口を開いた。

「想定外です。全く以って想定外です。こんな……こんな事って……」

そんな海人の姿に流石のエヴァもいたたまれなくなり、側に寄り肩に手を置いた処で不遜な呟きを耳にした。

こんな告白だったなんて。全く甘くないじゃないですか、しょっぱすぎます。と。

なぬっ？何を言っとるんだ？コイツは。

またもや、盛大な勘違いをしてるんじゃない？有りえる。

コイツなら充分に有りえる。

「おい。お前そもそも此処に来るのに、何を想定していた？」

聞いてはいけないような気がしたが、聞かずにはいられなかった。

「そんなの決まってるでしょう？愛の告白以外に何があるというんですか？」

それを聞いたエヴァはずっこけた。だから、何故そうなる！

「アホかー！何処をどう取ったら、あの手紙でその様な判断になるのだ！ええ？」

海人は手紙を取り出し机の上に置いた。

「自宅ポストに投函された手紙。しかも切ってが貼ってありません。これは直接投函された証拠でしょう？そして、何処かの家らしき住所。」

しかも夕食時の時間帯。これは一家総出でお出迎え。きっと、シヤイなあの子は、相談したんでしょう。

一人じゃ恥ずかしくて告白なんて出来ないわ！と。娘の一大決心

に立ち上がるパピーとマミー。

ああ、こうやって娘は大きくなっていくのか、と嬉しさ半分、寂しさ半分。そっと影から見守ろう。

家族みんなでワクワク、ドキドキ。期待に胸が膨らむね。それでは皆で待ちましょう」

何か間違ってますか？と。冷静に話す海人。

茶々丸はしきりに、名推理です、海人様。そう言って頷いている。

エヴァは思った。

アホだ。アホすぎる……。コイツ、ホントは、ただのアホなのでは？と。

「返せ！今すぐ返せ！先程の私の感動を返せー！それから茶々丸！お前も納得するな！」

エヴァは海人の胸倉を掴み揺らした。

えー？僕が悪いんでしょうか？絡繰さんは賛同してるじゃないですか。揺すられながら海人は思った。

暫くして落ち着きを取り戻したエヴァは睨みながら

「それで、真面目な話、キサマはこの件の判断はどうなのだ？」

おふざけはここまでだ、と言外にそう告げた。

「信じないというよりも信じられない、と言ったのが正直な気持ちです。その、魔法？ですか、その存在を見た事なんてないので。

マクダウェルさんの事は信用できるのでしょうが……。僕は自分の見た事しか、100%信じない主義なので。申し訳ないのですが：

…」

バツが悪そうに笑みを浮かべる。

それを受けてエヴァはニヤリと笑った。

「ならば、着いて来い。お前に魔法というモノの一片を拝ましてやろう」

そう言って立ち上がった。

「何処に行くんです？」

戸惑いながら海人は立ち上がった。

「いいから、黙って着いて来い。なに、取って食おうなどと思っらんよ」

ニヤリと笑って移動した。

茶々丸がこちらです、海人様。そう言いながら、エヴァの後に続く。

エヴァは小さな水晶の玉の様な物の前で立ち止まった。

「何ですか？これ。水晶？」

海人が首を傾げた。

エヴァは、何、私の別荘さ。目を瞑っている。そう指示した。

海人は取りあえず言う通りにする。程なくして目を開けると、辺りの様子は一変していた。

南国のリゾート地にいるかの様な風景に変わっていた。海人は目を白黒させた。

え？え？ココは何処ですか？

「ようこそ。私の別荘へ。」

腰に手を当てて、どうだ？良い所だろうか？得意げにそう言った。

海人はキョロキョロと辺りを見回し呆けている。

「何時まで、呆けている！まあ、いい。先ずは離れて見ている！」
そう言って歩いていく。

茶々丸に促されて、海人はエヴァからある程度、距離を置く。

エヴァは、しっかり見ているよ！そう言って詠唱を始めた。

海人はその様子を黙って見つめていた。

詠唱が終わり、エヴァは空に向かって氷の矢を打ち出す。

その様子を見た海人は、口をあめぐりと大きく開けた。

エヴァは、海人の様子を気にせず、次々と魔法を放っていく。

氷の矢が飛び、辺りが凍りつき、吹雪が舞う。

一通り、終わるとエヴァは戻ってきた。

戻ってきて、海人は口をポカーンと開けたままだった。

その様子に見てエヴァは大笑いした。

得意げに、腰に手をあて、どうだ？と言った。

海斗は、かぶりを振った。

まいった。本当にまいった。

今まで半信半疑でしたが、これでは認めざるを得ないではありませんか。

「さあ、魔法は見せてやったぞ！真実を知った貴様はどうする？重岡海人！」

腕を組み、返答を迫った。

「そんなのは、愚問です。決まっているじゃありませんか」

そう言って不敵な笑みを浮かべた。

「ここからは、もう後戻りは出来んぞ？引き返すなら、これが最後の機会だ。ここから先は、泣こうが、喚こうが、一切容赦のない世界。生きるも死ぬも、頼れるのは己の力のみ。生ぬるい毎日が終わり、殺伐とした日々の始まりだ」

さあ、どうする？これを聞いても変わらぬか？そう言ってエヴァは睨みつけた。

「くだいです。僕は、僕の意味でこちら側で生きます。僕の意味を曲げる事は何人たりとも出来ません」

力強い意思を瞳に宿し、そう言い切った。

エヴァは大笑いした後

「ならば、歓迎しよう！ようこそ、非日常へ！」

そう言ってエヴァは歓迎するように手を広げた。

茶々丸は、これから、宜しくお願いいたします。そう言って頭を下げた。

海斗は深呼吸をした。

いいでしょう。過去の僕。しっかりとあなたの意思は、引継ぎました。

そして、これからどうやって移り変わったこの世界で、立ち回っていくか、思案し出した。

これが、重岡海人にとって、2度目の魔法との邂逅だった。

海人のこらからの日々はこれを機に、波乱万丈な日々に変化して

いく事となった。

第3話 凡人は魔法を忘れ再び魔法に出会う（後書き）

いかがでしたでしょうか。

はい、もう何も言えませんが。

感想お待ちしております。

次回から、時間軸を戻そうと思います。

1年の間にあった事、読みたい方がいらっしゃれば、過去編として書こうかな、と。

感想、アドバイス、お待ちしております。

因みに作者、原作殆ど知りません。

ごめんなさい。

矛盾だらけの物語ですが、今後とも宜しくお願いいたします。

お読み頂き有難うございました。

では、また。

第4話 凡人は誤解と誤算の上傷つき倒れる（前書き）

作者のダメ中年です。

第4話お届けです。

しかし、こんな物語待っていてくれる人いるんでしょうか？

今回、何時にも増して、駄作です。

精進します。

では、どうぞ。

第4話 凡人は誤解と誤算の上傷つき倒れる

別荘から出てきた海人はリビングで優雅にワインを飲むエヴァを呆れた目で見た。

その視線に気付いたエヴァは、眉間に皺を寄せた。

「どうした？なんだ、その目は」

海斗は、やれやれと首を振り

「またワインですか？たまにはジュースでいいじゃないですか。」

「真正正銘のお子様なお前には分かるまいよ」

そう言って意地悪く笑った。

「お酒って美味しいんですか？中には美味しいモノもあるんですよが……。しかしそんな事言うって事は、気にしてるんですか？お子様体形」

僕は、気にしませんよ？そう言って笑った。

「アホ！誰が気にするか！私は好きで飲んでいるのだ！それから、お前はいい加減あきらめろ」

そう言って見つめる。

海人は眉尻を下げ

「そんなに迷惑ですか？」

傷つきます、そう言って口を尖らせる。

そんな年相応な表情に、エヴァは苦笑した。

「そういう意味ではない。お前は私と違って人間だ。普通に成長して死んでいく。お前と私とは、立っているステージが違う、と言ったんだ。今は、お互いの人生がたまたま交差しているにすぎん。そういう事だ」

まあ、嬉しくはあるがな、そう言って笑った。

海斗はため息を付いた。

「そんな事より、何かツマミを持って来い。夕食にはもう少し時間

が掛かりそうだ」

海人は肩を竦めて

「では、僕がツマミになるようなモノ作ってきます」

そう言って台所に向かった。

「ん？お前、料理出来たのか？それは知らなかった。だが私は味にはうるさいぞ？」

ニヤリと笑った。

海人はくると振り向くと、ニヤリと笑い

「グラハム・カーより美味しく作りますよ」

だから、ほんとにお前は14かつ！

海人はその言葉を受け、クスリと笑い急いで作りに向かった。

台所では、茶々丸がせっせと夕食の準備をしていた。

少し借りますね、そう声を掛け、冷蔵庫の中身を物色していく。

余り待たせるのもどうかと思い、手早く出来るツマミを思案する。

少しの間、茶々丸に台所を譲ってもらい、料理をしていく。

その様子を見つめながら、茶々丸は海斗に声を掛けた。

「海斗様。少しよろしいでしょうか？」

海斗は、手を休めず、ええ、いいですよ、そう言っ先を促した。

「人間とは何でしょう？」

簡潔に纏められたその一言に、海人は、

「それはまた、哲学的な質問ですね。どうしてそんな事を？」

茶々丸は先程のエヴァとの会話を聞かせた。

海斗は、なるほど、と納得し

「想う事、だと想いますよ」

茶々丸は首を傾げた。

「茶々丸さんが、エヴァに尽くすのは、プログラムだからですか？」

「私は、作られた瞬間から、マスターに仕える事が仕事です」

「エヴァに妹と言われ何も感じませんでした？」

それは……、と言いよんだ。

「では聞きます。想像してください。お前はただの従者で道具だ、

そうエヴァに言われたらどうですか？」

「それは、正しい認識です。私はガイノイドで、従者ですので……しかし……」

そう言って俯いてしまう。

「でも、何となく嫌なんでしょう？それは、茶々丸さん自身、家族と言われて嬉しかったのではないのですか？自身の在り方を知っていても、家族と言われる事が。何よりエヴァに言われたことが」

はっとして顔を上げた。

「それが、嬉しいと言うことです。茶々丸さんは、知らず知らずの内に、エヴァに対して主人という立場以上の想いを持っている事に他ならない、と僕は想います。決してプログラムではないでしょう？そういう事ですよ」

海斗は優しく微笑んだ。

「僕だって、人間とは？なんて質問に答えを出せるほど、賢くありません。だから、僕たちなりの答えを、一緒に探していきませんか？ね？」

焦る必要はありませんよ？そう言って微笑んだ。

茶々丸は僅かに顔を綻ばせ、宜しく願います、と頭を下げた。
「では、ツマミ持っていきますね。余り待たせると拗ねちゃいますから」

そう言って海人は出来上がったツマミを急いで持っていった。

エヴァは、持ってきたツマミを一瞥し、中々美味そうだな、と評価した。

「口に合えばいいんですがね。まあ、ワインには合うと思いますよ」

「酒の飲めない奴のツマミか。フン、まあいい。試してやる」

そう言って一口食べた。目を瞑り、時折、頷いている。

「まあ、及第点はくれてやろう。悪くない」

そう言ってワインをクイツと飲んだ。

ツマミは、タコとジャガイモのガーリック炒めとクラッカーにカマンベールチーズを乗せその上から蜂蜜を掛けた簡単なモノだった。

「そう言えば、そこそこ形になって来たから、次の段階に進むとするぞ」

「次は何をするんです？」

エヴァはニヤリと笑い、

「咸卦法さ」

「咸卦法って、究極技法って言ってませんでした？」

「ああ、故に習得は容易ではない。だが、習得できればこの上ない武器になる。お前は魔力量も気の量も、凡人並みだ。習得できたとしても、僅かな時間しか発動出来んが、それでも切り札には充分なる。しかし、お前なんで、魔法の発動があんなに出来ないんだ？基礎中の基礎である魔法の射手にしても、成功率6、7割だろう？」

「僕に聞かれても。魔法以外は、そこそこ出来るんですけどねえ」

海斗は、魔法が何故か上手く発動できない。気の運用は出来るのだが。

「体質なのか？いや、『火よ灯れ』は発動出来たし……。そう言えば、お前の祖父母はここに居たんだったな。何か聞いてないか？どんな些細な事でもいい。」

「いえ。特に何も。祖父母が此方に引っ越してきたのは、友人にいい所だから、と誘われたのが切欠らしいですよ。それまでは、ずっと三鷹でしたし。定年してこちらに引っ越してきましたから。出身もずっと三鷹です」

「祖父も父もサラリーマンだったな？確か。で、祖母も母も専業主婦。うむ。絵に描いたような平凡な一家だな」

「ほっといて下さい。いいじゃないですか。それで平和なら」

海斗は拗ねた。

「お前の祖父母は、父方の方だったな？」

確認するように聞くエヴァ。

ええ。それが何か？そういつて海人は首を傾げる。

エヴァは腕を組み、眉間に皺を寄せ考え込んだ。

「重岡……重岡、か。もしかしたら、お前は西洋魔法より、東洋の

魔術の方が性に合ってるかも知れん。可能性はかなり低いと思うが」
「どういうことですか？」

まあ、今は気にするな、そう言ってエヴァは話を打ち切った。

「そんな事よりも、これからお前はどうすのさ？」

「どうとは？」

「お前は学園側から目を付けられている。そろそろ感づかれるぞ？
このままではばれるのは時間の問題だ」

そう言って、海人を見つめた。

「そうですね。ここらではつきりスタンスを大っぴらに宣言して
しまっても問題はないのですが……」

海斗は軽いため息を付き

「ばれるのはいいんです。其れなりに騙していた事理由はありま
すから。しかし、それを逆手に取られ主導権を握られるのは避けた
い所です。何とかエヴァに手伝ってもらいながら誤魔化してきまし
たが……」

うーん、と考え込む。

「いい案が思い浮かばないので、取りあえず保留で。近いうちにい
い案を出します」

では、帰りますね、そう言って立ち上がった。

「メシぐらい食っていけ。茶々丸に用意させている」

「え？ いいんですか？」

「なに、たまには構わんさ。食べて行く時間ぐらいあるだろう？」

お言葉に甘えます、そう言って海人は笑った。

茶々丸の料理に舌鼓みを打ち、帰ろうとしている所でエヴァから
声を掛けられた。

エヴァは言いにくそうに

「まあ、その、何だ……さっきの事は気にするな。お前の事を嫌っ
てる訳でもないし、迷惑とも思ってたなどいない。ただ……やはり私
とお前とでは、生きる時間が圧倒的に違うのだ。お前の気持ちは、
嬉しいが……」

すまない、そう言って頭を下げた。

海斗は、頭を下げたままのエヴァをそっと抱きしめた。

「解っています。解ってはいるんです……。エヴァが謝る事なんてないんです」

そう言って頭を撫でた。そして手を離し、

「あはは。今日も振られてしまいました。それじゃおやすみなさい」
そう言って笑った。泣きそうな笑顔だった。

エヴァはその笑顔に何も言えなかった。去っていく海斗に僅かに逡巡し、

「カイ！……その、気を付けてな」

そう言って微笑んだ。

ありがとう、お休みエヴァ、そう言って走って帰って言った。

エヴァは、その姿を見えなくなるまで見ていた。

後ろから茶々丸がマスター、と声を掛けた。

エヴァは、何も言ってくれるな、そう言って自分の部屋に戻って言った。

茶々丸はその姿を黙って見つめていた。

海人は家に着くと、真っ先に風呂に入って汗を流した。

風呂から上がり、パックのまま牛乳を一気に飲む。

こんな事が出来るのも1人暮らしの恩恵ですね。いや、親に感謝です。

それにしても儘ならないものです。どうすればいいんでしょうね

……。

ブルーになる気持ちを切り替えるために、明日の予定を考えていく。

そう言えば、手持ちが少しばかり心許ないです。

明日下ろしに言って、食材も買わなくては……。それから本屋に

でも寄って……服も買いたいですね……

ベッドに入り、そんな事を考えながら、夢の中へと落ちて言った。翌朝、普段より少し遅めに起床し、朝食を食べながらその日1日のスケジュールを立てて行く。

食べ終え、後片付けし、簡単に家の掃除をし終わった頃には昼に近い時間になっていた。

海斗は、まず、お金を下ろしに行った。

さて、お昼でも食べましょうか。どこかいい所は……。と思索しているとき声を掛けられた。

「あれ？重岡君やない？どうしたん？こんなところで」

声を掛けてきたのは、近衛木乃香だった。1年前の事件の日に知り合ってから、ちよくちよく、学校や街で遭遇し、話す程度には仲良くなった二人だった。

「ああ、近衛さんですか。珍しいですね。お1人ですか？」

海人が出会う時は、大体、木乃香は誰かと一緒にいる。

「そうなんや。明日菜も、部活の皆も何か用があるっていうねん。せやから、今日は1人なん。重岡君は、何やってるん？」

海斗は簡単に事情を話した。

「そかそか。これからお昼なんやな。せやったら、一緒にどうや？ウチもそろそろお昼にしようと思ってたところや」

そう言って笑った。

海人としては、エヴァから木乃香の立場は聞いている。

関東魔法協会会長の孫にして、関西呪術協会の長の娘。

学園側から目を付けられている海斗に取っては、余り仲良くしている所を見られたくないのが心情だ。

現状の立場は別として、個人的にはいい子だと思ってるので嫌いではない。

まあ、神経質になりすぎるのも問題だと思って、快く了承する海人だった。

手っ取り早く、ファーストフードの店に入る。

それぞれ注文し席に着く。

「そう言えば、はじめてやなあ。重岡君とこうやって話すんは。何か不思議な感じや」

木乃香はニコニコと笑った。

「そうですね。普段は少し話す程度ですもんね」

海斗もそう言って笑った。

「なあ、そんで考えてくれたん？別にええやん。重岡君、別に他の部活動しておらん言うてたやん。な？」

木乃香は、会う度に自分の部に誘っていた。

「さんぽ部……ですか。その、僕にはちよつとアドベンチャーすぎるというか……」

「めっちゃ楽しいで？図書館島をな、こう、探検するんや。大丈夫やで。ウチも付いとるし、そんな危ないトラップもないで？どや？楽しそうやろ？」

身を乗り出して勧誘してくる木乃香。

いや、トラップって……。そもそも図書館にトラップがある事自体、おかしいでしょうに。

「僕も色々忙しいので。1人暮らしですから」

そう言って、やんわりと断る。

「そっか。残念やなあ。でも気が変わったらいつでも言ってや。重岡君は大歓迎するで！」

「何でそんなに熱心に誘うんです？僕なんかを」

木乃香は満面の笑みで

「ウチの勘や！重岡君が入れば、今よりめっちゃ楽しくなる気がするんや！」

その根拠は一体どこからくるんですかねえ。

海人は苦笑した。

木乃香は、それにしても……、そう言って

「何か、ウチらデートみたいやん？周りの人もそう思ってるんかなあ。なあ、どう思う？」

木乃香は悪戯っぽく笑った。

「うーん、どうでしょう。見る人が見ればそう写るでしょうが……。僕は余り気にしませんので」

海人は苦笑した。

「何や、詰まらんなあ。もうちょっと、慌ててもええやん。ウチってそんなに魅力ないん？」

「いえいえ。そんな事はないですよ？近衛さんは魅力的だと思いますよ」

そう言って笑った。

木乃香はじっと見つめて

「なあ、何かあったん？何か元気ないなあ。悩み事でもあるん？」

海人はその言葉にドキッとした。

海人は首を振り、そんな事ないです、と嘯いた。

木乃香はその様子に、んー、と唸って、ポンと手を叩いた。

「もしかして……恋の悩みとちゃうん？」

海人はその言葉に始めて狼狽した。

何で解るんでしょう？そんなに僕って分かり易いでしょうか……？

「うそ！ホンマにそうなん？めっちゃビックリや！」

今度は木乃香が狼狽した。

「なあ、良かったら相談に乗るで。」

木乃香はそうもちかけた。

海人は、大丈夫です、そう言って笑った。

木乃香は、腕を組み暫く思案した後、徐に立ち上がり、ほな、行くで、そう言って彼の手を引っ張り店の外へ連れ出して行く。

「ちょ、ちょっと何処に行くんです！近衛さん！」

何も答えず、ズンズン進んでいく木乃香。

公園に着いたところで、木乃香は手を離れた。

「店の中じゃ人が一杯で、話せないやろ？ここなら大丈夫や！ここにはウチらしか居らん」

そう言って笑った。

「でも、先ずはウチの方が先や！ウチの悩み聞いてくれへんか？」
これで、お相子や！そう言って近くのベンチに座った。

「ウチな、仲良うしたい子がおんねん。せっちゃん言うてな？クラ
スメートで、実は幼馴染なんや。」

でも、何か今は避けられとるん。小さい頃はめっちゃ仲良かった
んやで？

話しかけても逃げてしまうんや。何かウチが悪い事したんなら、
謝りたい。仲直りしたい。

でも、中々切欠が掴めないんや」
そう言って寂しそうに笑った。

「原因に心当たりは？」

木乃香は首を振った。

「ウチとせっちゃんは、元々京都にいたんや。その時に知り合った
んや。お父様に紹介してもらってな。」

それから、毎日遊ぶ様になってな？せっちゃん、このちゃん、そ
う呼び合って……。

楽しかったなあ、あの頃が一番輝いとった。キラキラいう感じに
な」

思い出しているのか、俯き、肩を震わせる。

「近衛さんは、あきらめるのですか？まだ何も聞いてないのに。そ
の彼女の心境は分かりませんが、近衛さんはまだ、何も聞いてない
んでしょう？」

本当に嫌われているのかも知れない。でも何かの事情があるのか
も知れない。

今の段階では全て憶測にしか過ぎません。それなら、先ずは行動
を起こして見ては？」

木乃香は、どうすればいいん？縋る様に見つめた。

「例えば、共通の友人か彼女の親しい人もしくはルームメイトとか、
に呼び出してもらうとか。」

逃げられるなら、自分の部屋に連れて来てもらうとか。もしくは、

自分が彼女の部屋に着くまで引き止めてもらっておくとか。幾らでもやりようがあります。

1人じゃ出来ないなら、話せる友人に協力してもらって、無理にでも話せる状況を作ればいいんです。

先ずはそこからはないでしょうか？僕はそう思いますよ」

それに……と続けて

「どんな結果であれ、また仲良くなる事を諦めるつもりはないのでしょう？

それに……近衛さんが、誰かに嫌われるような真似をするとは思えませんが、嫌われやすい人でもないのは、分かりますよ？自身持っていていいと思います」

海斗はそう言って笑った。

木乃香も、ウチ、頑張ってみるわ！満面の笑みでそう言った。

「おおきにな。何かやる気出てきたわ！さて。次は重岡君の番やで！」

そう言って海人を促した。

海人は、ふう、とため息を付き、詳しい事情はいえませんが、そう前置きして

「近衛さんのお察しの通り、僕には好意を持っている人がいます。まあ、悩みとはその事です」

海人はそう言って苦笑した。

「もう、告白はしたん？」

「告白というか、向こうは僕の気持ちは知っています」

海人は空を見上げながら言った。

「他に好きな人がいるとか？ま、まさか人妻と、ちゃうよね？」

「学年は一緒です。付き合ってる人はいませんよ」

「それって、ウチが知っとる人なんか？だ、誰や！？」

「それは秘密です」

海人はそう言って首を振った。

「で、でも、教えてくれれば、ウチが協力出来るかも知れへんで？」好奇心もあったが、何とか力になって上げたい、そう思う木乃香だった。

「お気持ちは有り難いのですが……こればかりは第三者がどうこう出来る問題じゃないので……。ああ、勿論近衛さんに限らずですよ？まあ、ちよつと複雑な事情があるので」

そう言って笑った。

木乃香はその笑顔が泣き笑いに見えた。その表情に胸がきゅうつと苦しくなった。

切ないなあ。苦しいんやろなあ。きつとウチよりも辛いんやろなあ。

木乃香の目に涙が溜まり、頬を伝わっていく。

海人は優しく微笑んで、ハンカチを取り出し涙を拭ってあげた。

「近衛さんは優しいですね。近衛さんが泣かなくてもいいんですよ？」

「これは、違うんや。重岡君が泣かへんから、ウチが変わりに泣いとるだけや」

海人は、ありがとう、そう言って、ハンカチを渡した。

木乃香は涙を拭った後

「お互い、頑張ろうな？ウチも諦めへんから、重岡君も諦めたらあかんで！」

そう言って笑った。

「そうですね。お互い頑張りましょう。上手く仲直り出来たら教えてくださいね？」

そう言って海人も笑った。

「当たり前や！重岡君も、上手くいったら紹介してな？約束やで？」もちろんです、海人は快く了承した。

暫く、談笑し日が傾き始めた頃、木乃香に、明日菜から連絡が入った。

何でも、家に帰って来たはいいが、木乃香がない。それで夕飯

の事もあり連絡したとの事。

木乃香は、急いで帰らんと！そう言って慌てて走り出した。
公園の出口で、ありがとなー！そう言って手を振り元氣よく駆けていった。

海斗はその姿に、微笑ましいモノを感じ、クスリと笑った。

空を見上げ、こんな1日も案外悪くないですね、そう思った。

さあ、僕も帰りましょう。

そして、ゆっくりと歩き出した。

公園の出口に差し掛かると、目の前に1人の少女がいた。

竹刀袋を肩に下げ、髪をサイドポニーにし、凛々しい顔立ちの少女だった。

じっとこちらを睨んでいる。

海人は、意味が解らず、触らぬ神に祟り無し、の言葉通りに、通り過ぎようとした。

その瞬間声を掛けられる。

「貴様、お嬢様に何をした？」

一瞬、海人は何を言っているのか解らなかった。

「は？お嬢様？一体誰です？」

首を傾げる海人。

「しらばっくれるな！先程、お嬢様を泣かせておいて！貴様、何者だ！」

ん？泣かした？えーと、もしかして？

海人は、エヴァから聞いた事があった。近衛木乃香には、護衛が付いている、と。

もしかして、この子なんですか？

ここは、知らない振りをするのが上策ですよ。

海人は、いち早く判断すると、

「えーと、お嬢様って、近衛さんの事ですか？あの一、それが何か？」

目の前の少女は、苛々したように

「さつきから、そうだと言っている！いい加減惚けるのはやめろ！お嬢様に何をしたのか聞いている！言わないと言うなら……」

そう言って目の前の少女は、竹刀袋から、その少女には不釣合いな刀を取り出した。

いわゆる野太刀と言われる刀だった。

海斗は、意外と冷静だった。

いきなり、バイオレンスな、展開ですねえ。

ん？この状況もしかして使えるかも……。

自分は、魔法生徒ではない。表向きそうになっている。でも、ばれるのは時間の問題。

ばれた時、その事で主導権を握られ、不利な状況にされたくない。ならばこの状況を利用して、有利に事を進めますか。

目の前の少女には悪いですけど。

まあ、いきなり切りかかる事はないでしょう。精々脅し程度でしようし。

向こうは自分を一般人だと思っているのですから。

さて、具体的にどうやって事を運びますかね？

海人はどうやって立ち回るか、高速に思考を回転させた。

海斗に取って唯一の誤算は、この目の前の少女は近衛木乃香の事となると、タガがはずれ、暴走する、というのを知らない事だった。

海人が血だらけで倒れている所を発見されるのは、この1時間後だった。

第4話 凡人は誤解と誤算の上傷つき倒れる（後書き）

いかがでしたでしょうか？

小説は、難しいです。

実は、主人公の名前ですが、ある実在の人物の名前を弄っています。さて、誰でしょう？

簡単すぎますね。

アドバイス、感想、お待ちしております。

何でもいいです。感想プリーズ！

失礼しました。

では。また。

最後に、お読み頂き、有難うございました。

第5話 凡人は倒れた後に何事も無かった用に復活する（前書き）

作者のダメ中年です。

第5話お届けです。

今回も、急いで書いたので粗が目立ちますが
暖かい目で読んでください。

シリアスが続きます。

海人の勘違い、書いてえ。

うそです。失礼しました。

心待ちにしていた方（いないと思いますが）
お待たせです。

では、どうぞ。

第5話 凡人は倒れた後に何事も無かった用に復活する

エヴァが海人の状況を知ったのは、次の日、教室に入って暫くしてからのことだった。

ガヤガヤと煩いクラスメートを冷めた目で見てみると、クラスのパパラッチ事、朝倉和美が騒ぎながら教室に飛び込んで来た。教卓に陣取り、得意げに喋りだす。

「ニュース！ニュース！大ニュース！昨日、通り魔事件が発生！被害者は私たちと同じ年齢の男の子！ほら、学年代表の……」

そこまで聞いた時エヴァの心臓が凍りついた。ガタツと椅子を倒し立ち上がる。しかしその様子は誰にも見咎められる事はなかった。

それよりも、大騒ぎした人間がいたからだった。それは、近衛木乃香だった。

「その話もっと詳しく教えてや！」

瞬時に詰め寄り問いただす。余りの剣幕に朝倉和美の方が吃驚している。

エヴァもツカツカ近寄り、有無を言わさない口調で

「さっさと話せ。朝倉和美。知ってる事全てだ」

木乃香が、隣に来了エヴァに視線を移した。木乃香には、焦っている様に見えた。

「え、えーと、私も詳しくは知らないんだけど……。何でも昨日の夕方に公園で血だらけで倒れてるのを、通り掛かった人が発見してすぐに救急車で運ばれたらしいよ」

木乃香は呆然とし、

「うそや……まさか……あの後……」

顔を青くして震えている。それを耳にしたエヴァは

「おい、近衛木乃香、貴様何か知っているのか。何を知っている！」

今度は木乃香に詰め寄った。

木乃香はうろたえながらも、昨日公園で少し話し別れた事を話した。

エヴァはそれを聞くと、今度は和美に視線を移し

「搬送された病院は何処だ？」

そう聞いた。

「ごめん。そこまではちよつと……」

和美が申し訳なさそうに言った。

エヴァは苛立ちを隠さずに舌打ちをし、茶々丸を伴い教室を出て行く。

木乃香は慌ててエヴァを追いかけた。

木乃香は、教室を出た所で声を掛けた。

「な、なあエヴァちゃん、何処行くん？重岡君とは親しいん？」

エヴァは、煩わしそうに

「別に。何度か話した事があるだけだ」

素っ気無く言う。木乃香は、その態度に腑に落ちない物を感じた。そんなら、何でそんなに慌てたん？

そう思ったが取りあえずは口に出さないことにした。

「何処まで着いてくるつもりだ。近衛木乃香」

そう言って立ち止まり、振り向く。

木乃香はその顔がひどく怒ってる様に思えた。

「なあ、何でそんな怒つとるん？ホントは重岡君と親しいちゃうん？」

おずおずとした感じで言った。

「別に、怒ってなどいないし、さして親しい訳でもない」
明らかに不機嫌そうな感じで答える。

お前は早く教室に戻れ、そう言って足早に去って言った。

木乃香は釈然としなかったが、授業の為教室に戻った。

エヴァは屋上に着くといつもここで過ごす位置にどっかりと腰を付いた。

唇に手をやりつめを噛む。その様子に、茶々丸は、マスターと一声掛けた。

その声に反応すらせず、エヴァはじっと考え込んでいる。やがて、茶々丸に向かって指示を出す。

「先ず、何処に搬送されたか調べろ。私たちは堂々と表立って動けない。繋がりがばれてしまうからな。後は誰がやったかだが……。チッ！現状では情報が少ない。取り敢えずは、カイの回復を待つしかないが……。容体も分からんか……。聞く事も出来んし……」

ブツブツ言いながらまた考え込む。

そんな様子を茶々丸は心配そうに見詰めていた。

教室に戻った木乃香は、意気消沈といった様子で席に座った。心配した明日菜が声を掛ける。

「大丈夫？木乃香……。その……無事だといいわね」

そう言って黙り込んだ。

明日菜も昨日、木乃香から海人との事を聞き自分の事の様に喜んだ。

刹那の事も多少知ってるので、常々何とか2人の関係を修復させたいと思っていた。

渡りに船とばかりに張り切って、自分も協力するわ！と宣言した矢先の事だったので、ショックだった。

海人の事もそんなに親しい訳でもないが、悪い奴には見えなかったし、昨日の一件でさらに評価が上がっていた。明日菜は元気付けるように

「木乃香、病院の場所聞いて、お見舞いに行こ？ね？」

そう言って声を掛けた。

「そうやな……。ありがとな、明日菜」

そう言って笑った。

「しかし、許せないわね！その犯人！見つけたら只じゃおかないんだからっ！」

そう言ってプンプン怒り出す。

「ウン、ウチもや！絶対許さへん！償ってもらわな、ウチの気が済まんえ！」

私も私も！そう言っただけで追従する明日菜。

「それに、折角、せっちゃんとの仲直りの作戦を教えて貰ったんやから、実行せな申し訳たたへんやん。弔い合戦や！」

そう言っただけで立ち上がり気合を入れる。

明日菜は、勝手に殺しちゃ可哀相よ！と突っ込みを入れた。

「でも、木乃香、どうやって仲直りするの？何か作戦あるの？」

「それ何やけど……」

そう言っただけで木乃香は教室を見回した。

「せっちゃん見当たらんや……。どうしたんやろなあ」

明日菜はそこで提案した。

「それなら、同じルームメイトに聞いた方が早いんじゃない？」

そう言っただけで、龍宮真名を指差した。

木乃香は、明日菜、グッジョブや！そう言っただけで立ち上がった。

2人で真名に近づく。

声を掛けたのは明日菜だった。

「龍宮さん、ちょっといい？」

そう言っただけで切り出した。

真名は、ん？何だい？そう言っただけで顔を向けた。

明日菜は木乃香にバトンタッチした。

「あんな？せっちゃん、何処に居るか知らん？今日まだ、見てないんや」

「ああ、刹那かい？何か今日は具合が悪い、とかで休むらしいよ」

真名は肩を竦めそう言った。

木乃香は、それを聞いて、そうなんか……。と考え込んだ。

「なあ、龍宮はん。ちょっと協力して貰うてもええやろか」

真名は、怪訝な顔で

「どんな事だい？あんまり、面倒な事はご免こうむるよ」

「そんな難しい事ちゃうで。今日な、せっちゃんのお見舞いに行き

たいんや。せやから、お邪魔する事と、せっちゃんにはその事を内緒にしたい欲しいんや。後、出来れば引止めといってくれるとバツチリなんやけど……頼めないやろか？」

上目遣いをお願いする。

真名はそのお願いに

「何だ、そんな事かい？ そんな事ならお安いご用さ」

そう言って笑った。

「ありがとなー。そんなら、夕飯はウチが腕によりを掛けて作るで！ 皆で食べたらきつとめっちゃ美味しいで！ 期待しててや！」
そう言って満面の笑顔を浮かべた。

ああ、期待してるよ、そう言って真名も笑った。

明日菜も、木乃香、頑張ろうね！ と言って笑った。

木乃香は授業中も終始笑顔だった。

放課後になり、龍宮は、じゃ先に帰ってるよ、そう言って先に帰った。

木乃香と明日菜は、すぐにスーパーに寄り夕食の材料を買って、刹那達の下へ急いだ。

着いたのは丁度夕方だった。木乃香は、気合を入れてチャイムを押した。

程なく、真名が出てきて、待ってたよ、と言って二人を招いた。
入ってきた2人に刹那は吃驚して

「お、お嬢様！ な、何故ここに……」

おろおろし始めた。

「あんな、せっちゃんが具合悪いゆうのを聞いてな？ お見舞いに来たんよ」

そう言って笑った。

刹那は、真名をキッ！ と睨みつけたが、真名は肩を竦めただけだった。

「せっちゃん、大丈夫？ すぐに美味しい物作るから、ちょう、待ってな」

そう言って台所に向かった。

刹那は逃げ出そうとするが、真名と明日菜に止められる。

刹那は、そわそわして、心ここにあらず、といった状態になった。真名はその様子に、眉間に皺を寄せ、

「どうした？刹那。昨日の夕べから、おかしいぞ？何かあったのか？そう言って聞いたです。

刹那は、いや……。何も……。そう言って黙り込んだ。

その様子に真名も追求しなかった。

程なくして、部屋に美味しそうな香りが充満し、食卓に次々に料理が並べられていく。

皆、食卓に着き、食べ始めるが、一向に刹那だけは食が進まない。木乃香は寂しそうに

「な、なあせっちゃん、ウチの料理不味いん？それともまだ具合悪いんか？」

ごめんなあ、そう言って木乃香は謝った。

「い、いえ！お嬢様は何も悪くありません！」

そう言って否定する。場が悪くなりかけた所で、明日菜が

「そ、そういえば、昨日通り魔事件があったのよ！」

そう言って話題を変えようとした。

その話題に刹那はビクツと肩を揺らす、気付いたのは真名だけだった。

「そうなんよ。あんな？重岡君言うてな？ウチの相談に乗ってくれた子なんや。せっちゃんの事も話したんやで」

そう言って笑った。

刹那は、顔を真っ青にして、俯いた。

それに気付かず木乃香は話し続ける。

「ウチの恩人みたいな子や。真剣にウチの悩み、聞いてくれてな？アドバイスもしてくれたんや。やから、犯人にはめっちゃ腹たつわ！ウチ、絶対許さへんねん！」

そこまで言ったとき刹那の様子がおかしい事に気付く。

顔が真っ青を通り越し、白くなりガタガタ震え始める。

その様子に木乃香が

「せ、せっちゃん？どうしたんや？大丈夫か？まさか……何か知ってるん？」

その一言に刹那は大きく肩を揺らした。

耐え切れなくなった刹那は部屋を飛び出した。

それにいち早く反応した真名も追いかけていく。

それに遅れて、木乃香も追いかけた。

明日菜に、ここで待つように指示して。

真名は、刹那！と叫び、追いついて肩を掴む。

刹那は必死に振りほどこうとする。あまりのその様子に真名は、落ち着かせようと声を掛けた。

「刹那！とにかく落ち着け！どうしたんだ！何時ものお前らしくないぞ！」

刹那は、ほっといてくれ！と叫び、もがく。

只ならぬその態度に真名も必死に抵抗する。

その時、木乃香が追いつき

「せっちゃん！」

と声を掛けた。

刹那は、ビクッと肩を揺らし、抵抗するのをやめた。

木乃香は、ハアハアと息を切らせ、刹那の肩を掴み必死な形相で

「な、なあせっちゃん。何か知つとるん？なあ？知つとるんやろ？

教えて！なあ！頼むわ！どんな些細な事でもええねん！重岡君は、

ウチの恩人なんや！この通り！お願いや！」

そう言って肩を揺らす。

「わ、私、私は……私……」

そう言って俯く。

その時、別の方向から声が掛かった。

「その話じっくり聞かせてもらおうか！」

そう言って、茶々丸を伴いゆっくりとした足取りでエヴァが歩い

てきた。

エヴァの登場にその場にいる3人は吃驚する。

エヴァは、刹那の正面から睨むように見据え

「キサマの知ってる事を全て話せ。虚偽は許さん！拒否するなら……」

そう言つて木乃香の方に目を向けた。

瞬間、刹那の心臓が凍りついた。

600万ドルの賞金首、闇の福音、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

裏の世界を知る刹那だからこそ、エヴァが何を考えているのか想像が付いてしまった。

きつと拒否すれば、木乃香を人質にするだろう。

この場で木乃香を庇いながら戦える程甘い相手ではない。真名に頼んだところで協力してくれるだろうか。真名は傭兵だ。

その辺はシビアに判断する。友人のよしみで、多少の時間稼ぎはしてくれるかも知れないが、それだけだろう。

かと言つて……、それに何故、エヴァンジェリンさんが……？そう思案していると

「なあ、何でエヴァちゃんがここにいるん？やっぱり重岡君と何か関係あるんか？」

木乃香が声を掛けた。

「近衛木乃香。お前には関係ない。お前は家に戻つてろ」
にべもなく言い放つ。

流石に温厚な木乃香も、この言葉にはカッとなった。

「関係ないなんて事はあらへん！ウチは友達や！彼はウチの恩人や！エヴァちゃんやつて言うてたやんか！重岡君の事は親しくないつて！関係あらへんのはエヴァちゃんの方やろ！」

木乃香には珍しく声を荒げた。エヴァもその言葉に

「ふざけるなよ！近衛木乃香！何も知らんヤツが！あまり調子に乗るな！」

そのセリフと共に濃密な殺気を叩き付ける。

瞬間、3人の背筋に冷や汗が流れた。

木乃香はその殺気に体を震わせ、刹那と真名も動けなかった。

ふっと殺気を解き刹那に再び声を掛ける。

「さあ、話してもらおうぞ？桜咲刹那。よもや、拒否はするまいな？」

有無を言わせない口調だった。

観念したかの様に刹那は頷いた。

着いて来い、そう言って先導した。

木乃香も着いて行こうとしたがエヴァに止められた。

木乃香は、裏では重要な立場にいるにも関わらず、その事を全く知らない。

この話を聞くという事は、即ち木乃香もその事を知るという事になる。

木乃香以外は問題ない。皆その関係者だからだ。

ただその特殊な立場上、話を聞かせるには問題があった。

エヴァは単に面倒くさい、という理由でしかなかったが。

木乃香は必死に言い続けた。

エヴァは煩わしくなり、気絶させようか、と動こうとした時だった。

「その話、僕も聞きたいね」

声を掛けたのはタカミチだった。エヴァは舌打ちをし、厄介な事になったと思った。

「何でお前がいる。タカミチ」

そう言ってエヴァは眉間に皺を寄せた。

「朝倉君に聞いたのさ。この事をエヴァが随分気にしていたって。

君は、重岡君とは何も接点がなかったはずじゃないか？」

違いかい？言外にそう込め、目を細めた。

エヴァは自分の迂闊さに歯噛みした。あのお喋り女が黙っている筈なんかない、と。

気付かれない様に自分を監視していたのか、と。

自分でも気付かない程、動揺していた様だ。

ここで呆けては余計に自分達の首を絞める事になる、と判断したエヴァは再度舌打ちをし了承した。

「じゃ、行こうか」

そう言っただカミチは歩き出した。

「待て。何処に行くタカミチ」

そう言っただエヴァは問い詰めた。

「何処って、学園長室だよ、エヴァ」

そう言っただカミチは笑った。エヴァは瞬間理解した。

やられた！あのジジイは、これを逆手に取って木乃香への魔法ばれのスケープゴートにするつもりだ、と。エヴァはタカミチを睨みつけた。

タカミチは何処吹く風、と言ったように飄々としている。

エヴァは再度歯噛みした。まんまとしてやられた。

カイ、すまん。これは完全に私の落ち度だ、エヴァは心の中で海人に謝罪した。

程なくして学園長室に着き、皆でぞろぞろ入っていく。

刹那は顔が真っ白だった。

中には学園長1人が座って待っていた。

皆がソファに腰掛けた所で学園長が口を開いた。

「さて、皆が集まった所で話しを進めようかの。先ずこの度の事件に付いて知つとる者は、包み隠さず話して欲しい。」

そう言っただ学園長である近衛 近右衛門は皆を見渡した。

皆の視線は刹那に移動した。

刹那は俯いたまま、涙を流し始めた。木乃香が背中を擦り、必死に慰めた。

やがて、一通り落ち着くと、事の詳細をポツリポツリと語りだした。

木乃香が海人と一緒にお昼を食べた事。その後2人で公園に移動した事。何やら2人で話していた事。話している途中で木乃香が泣

き出した事。それを見て怒りが沸いた事。

その後また少し話していた事。最後に笑って公園で別れた事。ゆっくりゆっくり話して言った。

そして、自分が公園の入り口で待ち伏せした事。木乃香と何をしていたか問いただした事。

海人が話していた内容を言わないで無碍にされた事。それに怒りを感じた事。

売り言葉に買い言葉で口論となった事。そして怒りに任せて、夕凧を抜いていた事。

そこまで言って、刹那は押し黙った。

その様子に、木乃香は嫌な予感を感じた。

学園長を始め皆の顔が強張って行く。

そして最後に、刹那は泣きながら、

気付けば、自分が海人を斬っていて、その後一般人を斬った事に恐怖を感じて逃げた事を告げた。

その瞬間、エヴァから先程、木乃香に向けた時とは比べられない程の濃密な殺気が放たれた。

エヴァは自制が効かなかった。

こんな事をすれば、海人との関係がばれてしまう事は分かっていた。

頭では理解しているが、感情が追いつかなかった。

その殺気に学園長を始め、全ての人間が凍りついた。

「桜咲刹那、遺言はあるか」

そう言ってユラリと立ち上がった。

それにいち早く反応した近右衛門は、

「待つんじゃない！エヴァ！」

そう言って立ち上がった。

エヴァが刹那を手に掛けようとした瞬間、タカミチがエヴァの肩を抑えた。

「エヴァ、それだけはダメだ！それだけは、やっちゃいけない！」

エヴァはタカミチを吹っ飛ばす。タカミチは壁に叩きつけられた。エヴァは激高し再度、刹那を手に掛けようとした。それに割って入ったのは以外にも茶々丸だった。

「そこをどけ！茶々丸！何故そいつを庇う！返答しだいではお前でも許さんぞ！」

エヴァは茶々丸を睨みつけた。

茶々丸は、首を横に振り

「桜咲さんの為ではありません。マスターの為です。そんな事をすれば、きっと海人様は悲しみます」

そう言ってエヴァを見詰めた。

エヴァは茶々丸睨み、舌打ちをして、どっかりとソファに沈みこんだ。

一同はほっとした。

暫くの間誰も言葉を発せなかった。沈黙の後

「な、何でや？何でせっちゃんはそのんな事したん！何でや！どうしてや！重岡君は、せっちゃんと仲直りしたい言うたら、アドバイスしてくれただけや！どうして、せっちゃんが傷つけないあかんかったんや！答えてや！せっちゃん、どうしてやあ……」

そう言って泣き崩れた。

刹那はその木乃香の言葉に硬直した。

「あ……あ……」

と口をパクパクし、過呼吸状態になっていく。

真名がそれに気づき、刹那を抱きしめ、背中を擦り、落ち着かせる。

木乃香もその様子に気づき、刹那に抱き着きわんわん泣き始めた。刹那も過呼吸が収まり、木乃香に抱き着き泣き始めた。

お互いに、ごめんなあ、堪忍なあ、そう言って謝りながら。

暫く誰も声を掛けなかった。

タカミチも起き上がってエヴァに、全く肝を冷やしたよ、と言って苦笑した。

エヴァは、フン、謝らんど、と言ってそっぽを向いた。

漸く刹那と木乃香が落ち着き始めた頃、近右衛門が口を開いた。

「木乃香や、刹那君がこんな事をしてしまったのも、訳があるんじゃない」

エヴァはその言葉を聞いて、近右衛門を睨みつけた。

この罪を海人に擦り付けようとするなら、徹底的に暴れてやろうと思った。

貴様の大事なモノを目の前で蹴り殺してくれる、と。

近右衛門はその視線を受け、視線の意味を理解しているのか、そんな事はせんよ、と言った。

木乃香は、何やの？その訳って、と聞いた。

刹那は、赤い目で近右衛門を見て狼狽する。近右衛門は、心配せんでも、大丈夫じゃ、そう言っただけで木乃香に真剣な顔付きで話し始めた。

「木乃香や。先ずお前には謝らんといかんのう。隠しとった事は悪かった。じゃが、この事はお前の父の婿殿の意向もあったのじゃ。婿殿が悪いんじゃないぞい。考え方の違いじゃ。わしも、婿殿も木乃香の事を大事に思っとるのじゃ。それだけは信じてくれんかの」
そう前置きして語りだした。

魔法が存在する事。麻帆良の事。自分が関東魔法協会の会長である事。

詠春が関西呪術協会の長である事。二つの協会の対立の事。

木乃香の立場の事。護衛である刹那の事。

それらを言い聞かせる様に話した。

全てを聞き終えた木乃香は、呆然とした。そしてゆっくり吟味するかの様に考え出した。

程なくして木乃香は、近右衛門に、話してくれて有難うと言った。

そして、刹那に今までの事の感謝と、先程の責めた事を詫びた。

刹那は恐縮していたが。

それらを話し終えた後、今まで聞き役だったタカミチが口を開い

た。

「今度は、僕がエヴァに聞きたいね。君は何であそこにいたんだい？君と重岡君とは、もう何も無かったはずじゃ？」

そう言って厳しい視線を向けた。同様に近右衛門の表情も厳しい。エヴァは、どうするか迷った。事ここに至っては隠し通すのも難しい。どうしたものか、と思案していると、学園長室の内線が鳴った。学園長が出る。

「うむ。ワシじゃ……な、何じゃと！それは真か！……うむ、うむ。あい、分かった。君はそのままその場で待機しといてくれ」

難しい顔をして受話器を置いた。そして

「……重岡君が病室から居なくなっただろうじゃ……」

重苦しい雰囲気で告げた。室内に衝撃が走った。

「どういう事だ！ジジイ！詳しく話せ！」

エヴァが詰め寄る。近右衛門は

「見回りの看護婦が様子を見に行った時には、もぬけの殻だったそうじゃ。」

「そう言えば、容体はどうだったんだ？」

「うむ。傷自体はそんなに深くは無かったそうじゃ。ただ、放置されていた時間が長かった為、出血量が多かったらしい。それで意識が混濁していたそうじゃ。すぐに輸血を開始したので、命に別状は無いとの事だったそうじゃが……」

エヴァはその報告に刹那を睨みつけた。刹那は俯いて震えた。木乃香は複雑な気持ちだった。

責める事も、許す事も出来ずに、板ばさみになっている。

また室内に沈黙が下りた。その時、また内線が鳴った。

「うむ。どうした？……な、何じゃとお！すぐに、通してくれい。うむ。宜しくの」

近右衛門はため息を付いた。

「今度は何だジジイ！何が起こった！」

「それがの……今、ここに向かつてるそうじゃ……重岡君が」

そう言ってまたため息を付いた。さっき以上の衝撃が走った。

エヴァと木乃香は立ち上がり、刹那は真っ青になり、真名とタカミチはポカーンと口を開け、近右衛門は嘆息した。

暫くすると、ドアをノックして、失礼します、という声が聞こえた。

近右衛門が、緊張した声で入室の許可を出す。

そして海人が入ってきた。多少顔は青白かったが、足取りは確りしていた。

その姿に木乃香は涙ぐみ、エヴァと茶々丸はほっと息を付き、刹那は顔を白くさせ、タカミチ、近右衛門、真名は厳しい顔をする。

海人は室内を見回し、

「皆さん、重岡海人、只今復活致しました」

そう言ってニヤリと笑った。

第5話 凡人は倒れた後に何事も無かった用に復活する（後書き）

いかがでしたでしょうか。

と、言うか回を追う毎にクオリティが下がってますよね。

難しいです。

アドバイス、感想、お願いいたします。

やる気出ます。

お読み頂き有難う御座いました。

次回から、更新速度遅れるかも……です。
では、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5547y/>

不変の意思を持つ凡人は高みに上る

2011年11月20日12時25分発行